96-521

佛學概論

竹冷著

閱讀
43. 8. 12
內交

自序

此俳遊記なるものは、曾て机邊に置きて過去を偲ぶべき料とせし、予が其時々の手記其儘を出版せるものにして、敢て訂正潤色せざる所が、却て當時の情況を知るべく考ふ、故に行文一定せず、もし夫れ到る所のもてなしぶりや、或る人名抔を省き、風雅らしくものせ

ん歟、出來ざるにもあらざるべし、されど左程に手數をかけて風流がるこそ、頓て俗了すべき事には屬すべけれ、中に就て往々政治旅行のものあるも、予に於ては併せて俳旅行たりしなり、既に然りとせば見易きが爲め、之を俳遊記と爲す、蓋し大方の諒恕を得ん歟、

明治四十三年三月　　聽雨窓主人識

俳遊記目次

佐渡の旅……一

越路に入る──佐渡へ向ふ──廿三里浪の上──佐渡の地勢──産物──風俗──涙に濕るゝ旅衣──北條氏の暴政を憤りし本居宣長翁──御陵の跡──順德帝の御歌──抱石梅──日蓮上人星下りの梅──眼病と鍾湯──金掘節と鑛山踊──筆にほつゝ岩清水

雪の旅……一〇

旅は物憂き事ぞかし──三月七日の夕長野に入る──雪の日の夜高田に着く──嬉む事一丈以上三丈の大雪──雪車にて出發──此邊雪掘の事を雪割と呼ぶ──雪の信濃川を下りて新潟に入る

拾ひものゝ記……一六

三河美濃飛騨を巡る事二十日間──立憲政体とは何ぞ──拾ひ物三つ四つ

ひまぬす人の記……一八

衆議院の解散──朝鮮に一揆起る──月影細し湖水の面──ひまをぬすみて四句を得ぬ

雨の旅……二〇

雨に霧雨のいと心地よし──對外硬派の大會──長門の江戸ッ兒大岡硯海──肥後の勇者佐々克堂──三河の剛の者志賀刈川──武藏鎧の達者加藤城陽──下總の明吟家小久保城南──武田流の兵術家鄭袋藏所──豐後の住人久保半城──甲斐のドクトル前田孤鶴──一同皆是れ天下の辯者──刈川夕立を背負て立往生──櫻東華族のお里を現す──克堂の前置き──當惑の硯海──城陽背て歐米を股にかけし事あり──長命疑なき城南──健脚ぶる藏務ある孤鶴と藏所──牛城曰く劍舞の講釋は明晩仕るべし──鹽餡の饅頭に舌鼓を打つ──狼橋驛──姪子顏の大黑屋主人──鮎、酒、ラムネ、香の物──蚊屋の低きをつぶやき蒲團の短きを罵る──醉醒めて夜半の大音聲──氣煙師士──愈々府中に乘込む──松風涼しく壓の上の月影淸し──櫻上詩を吟ずる多感の士──武田氏の舊城を觀る──演說會──仕込杖を拔て劍を舞す──天地も震ふ大喝采──馬の背を借る吉田迄──花いろ〳〵の夕間暮──陶算家の目的がちりと外る……三五

露の袂の記……三五

秋雨蕭々の朝東都を出づ──軍事費を議する爲の旅行──政海の名士と相携へて遊州中泉へ着す──雲の花火夜の煙花──名古屋を横ぎる──神

戸に於ける改進黨臨時大會──岡山へ飛ぶ──月明かに後樂園の露清し──尾の道──谷子爵萬歳を唱ふ──吉備第一の眺望──いよ〳〵廣島へ入る──大本營へ帰り由天機を伺ふ──陛下の大御心に感泣す──三百の議員中欠席せし者僅に二人のみ──議長は柿本副議長は島田──宇品へ出で奥へ渡る──修繕中の松島艦と比叡艦──一穏の燈影うそ寒き頃寓所へ歸る──廣島に於る衆議院開院式──龍顔を拜し奉る──月出で汐滿ち鹿の聲を聞く宮島の秋──殘月を踏んで流れに歌ぐ──福島正則の創設せし庭園──三々五々人影水面に落つ──忙中閑あり菌を狩る──松方伯及稲垣滿次郎氏に會す──周防の錦帶橋──廣島を發し舞子に入る──詩話俳談夜と共に深し──目醒むれば戸外雨蕭々──腕車を驅て明石へ急ぐ──奈良の秋──高尾の紅葉狩らんとて──さても累永な京の人──梓になりし兩足──雨の音を聞きながら新橋に着す……五二

かくや殿の旅日記──連れしは妻と二人の子──譚を說き文を論じ俳を談ず──体量を計る──早咲きの梅を賞す──飯人燕翁發句集の清書を促す──どてらの上に羽織をひっかけ高きに登りて初日を拜す──元旦の句十四句──賀狀のいろ〳〵──昔を偲ぶ熱海の地──湯前の神社へさゝげし折句──各自十八番を出して夜更け迄遊ぶ──小供澤山と一月遊びの鉢卷──かるた合戰──東京より急電──避寒は熱海に限る……六三

麥稈帽子……六八

乾坤無住同行二人──風羅坊が笠のすさび──淋しがらせよ閑古鳥──蕗の尿する枕元──わが世は輕し麥稈帽子──蕗ころ〳〵──誠顔なる月見かな

月瀨より……

ほか〳〵致候──沼津を夜逃げす──故生川春明翁──翁の著書──短冊は一

葉を紅葉へ一葉を酒竹へ──阿濃浦──栗因の句──阿濃燒──伊賀の上野──雨の手に桃と櫻や翁餅──伊賀越仇討の場所──蕣虫庵──古郷塚──月ケ瀬に着す

笠置より……七四

見附の大略を申上候──笠置山──半ば破れたる水車小屋──月ケ瀬保勝會──梅は漸く盛りに御座候──遥に搖れ乍ら桃香野の絶景を賞す──太平記を憶起して涙を流す──旅は藥に御座候──小波珍書を得たりと報じ來る

俳諧草枕……八〇

海潮に影を浸す富士の山──湖上に映ず叡山の影──白木屋の本店──高山彦九郎の借用證書──可全の句──柏原本店──耳塚──西行庵に葉櫻を賞す──古代を慕ひ今代の太平を謳ふ──僧正が谷にて聞く時鳥の聲──

後水尾院の御句──扨はあの丶一三子──白炭の忠知──令德が馬合羽の句──蕉翁の句──大江丸が牡丹餅の句──燈下に膝をくづじ鴨川に耳を澄す──峯に雲置く嵐山──二丁のぼれば大悲閣──野の宮等──雨の宇治──古書を枕として涼風に眠る──しらゝ落くぼ京太郎──俳諧木太刀──稻荷旅社──田中時雨──瓜田夕照──南里刈藍──村路若草──七條商客──堀河蛙聲──橋上秋月──東寺晉鐘──祇陀林藤──宗鑑の杜若──喧嘩好きの重賴──吳天に白髮の恨みを重ぬ──雨の銀閣寺──京のお祭り──蜀山の狂歌──草枕の露を拂ふ

臺灣と南清……一二〇

明石海峽を過ぐ──門司と馬關見物──歸燕に遇ふ──南京虫に攻めらる──臺北へ向ふ──後藤新平氏と高談放談す──臺灣問題に對する予の意見──臺灣の氣候──南清に入る──灣廣く水深き廣東港──盜賊多き爲街

踏の門を鎖す──三君祠──水上の一大市街──廣東の人口──路に迷ひて巡査に送らる──虎溪殿──南普陀寺──磐山殿──風動石──白鹿洞──仙人洞──上海商──金玉均の惨殺せられたる旅館に臥す──楊子江──沿岸の蘆原風に呀えたり──江寧府──風を受け甲板に月を賞す──馬當磯に到る──此邊の風景すべて畫に似たり──陶淵明が知事たりし所──潯陽江頭琵琶を彈ず──蘇東坡の赤壁の所在地──漢口の地形──夏口城跡──白露江に横る楊子江の曉天──龍華寺へ詣づ──太湖府へ參詣──楊子江沿岸の俳的景物

滿洲丸……一五一

日露の戰正に酣なり──觀戰艦──世界各國の軍人と吾國の名士等之に乘込む──六連島を過ぎり玄海灘に差懸る──無線電信──二龍山を占領すとの來電──水雷の漂流──黃海洋上の元旦──武裝せし海武裝せし山

初日影──松樹山占領──望臺攻撃中──旅順よりの電話──開城に至るべしとの一大快報──遼陽に向ふ──南山の麓に於て旅順開城を耳にす──鶴岳城兵站司令部にてサツマ汁やうの物をすゝめらる──開院宮殿下の御機嫌を伺ふ──三角山上の一行──夜に入り大砲の音盛んに聞ゆ──恤むべき捕虜──旅順口の地勢──露兵の土産──旅順攻撃の日取──戰中の佳話──開城の原因──港底の露艦──一行東京灣に入る

韓清行……一八二

馬關に於て河豚を喰ふ──韓國に入る──死刑執行せし後にて市場を開く──白衣の韓人──京福宮拜觀──バルチック艦隊全滅の報に接す──若狹丸へ乘込む──日本海々戰祝勝會──奉天に向ふ──沿道の柳風趣に富む──奉天の人口──北陵に參拜す──萬里の長城遥ひ行く人──秦王島觀察に向ふ──二里にして有名なる首陽山あり──望夫石及妻女廟の謂れ

||天津北京の月||爪切よろし〳〵||殷和國の古戰場を吊ふ||喇嘛寺へ詣づ||北京の街路||殖親王及恭親王を訪ふ||風蕩る招賢堂の俳席||見玉大將との談話||旅順に入る||市中見物||日南の狂歌||廣島着||開盛樓上の懇親會||踏邸

高麗の松風……二二八

古來機物の產地に有之候||別紙の俳句卯杖へ可然御披露下され度候||募集句評は鉛筆にて||不眠症物語||組軒局同人へよろしく||俳句

秋雨日記……二三三

北海道の秋色を賞せんとて||風雨に送られて出發す||函館五稜廓にて||利別村字メツプ||林檎の產地||小樽港の雜沓||札幌農科大學||旭川の兵營

峽中吟行……二三五

水源地探究に向ふ||猿橋附近の實景||御嶽登山||天神平より勝景に入る||洪水後の石原道||馬ほく〳〵の暑さ哉||小雨に濡れて山路を辿る||甚滑咲くとは||山深うして溪流耳に近し||日下部博士の句||見返り紅葉||談じつゝ蟻れつゝ行く||暑くろ〳〵の檜笠||青梅驛の夕

紀の勝地……二四四

紀州の俳人||一入||宗明||橘堂||句樹||寥秀||白共||本阿房||岷考||路長||風梧||蓮骨||白弘||春陰||水齊||石雄||二見が浦の二見館||浦の雨||蚊張の宮||凡ンなる岩の日の出前||濱の涼風||古風の盆祭||秋立つ||殘暑||念佛寺にて俳話をなす||有馬村花の窟に立寄る||熊野山中にて||瀞峽の風光||音無川||三十三間堂柳伐の跡||飛雪の瀧||布引の瀧||奕の瀧||百夜月村||九重村||竹筒村||天武天皇の勅願所||神武天皇の御宮跡||那智の瀑布||船に日暮れて秋の雨||今宮

は虫所なり墜なり──和歌の浦──三井寺──妙國寺の蘇鐵──住吉に詣づ

水の流れの記……二五九

峽中の水源踏査の必要──盆景に似たる甲府市──水戸の撮影──清流に臨んで昼餉を食す──一行の氣焰──到る處にて俳趣を拾ふ

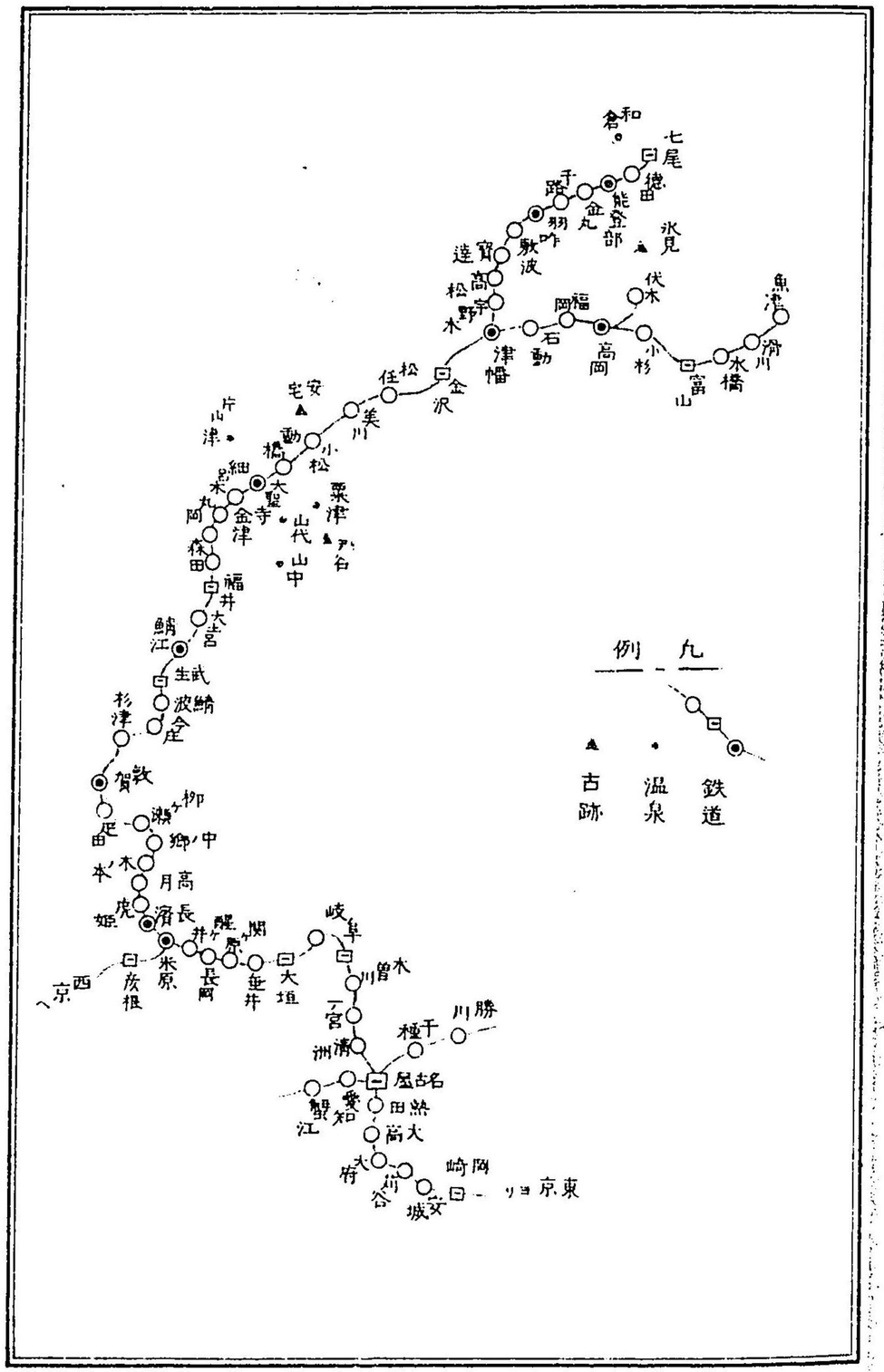
涼風記……二六七

鳥啼魚の目は涙──奥の田植唄──兵どもが夢の跡──石より白し秋の風──扇引さく別れ哉──北國日和定めなき──逆に辿らん奥の細道──野坡──良恕──日能──鶯谷──山只──草吹──東恕──伯苑──歌川──蓬雨──歸一房──李育──令羽──南花──梨一──風外──竹二──仲也──雪栽──以哉坊──北枝──凡兆──勾空──山巒──萬子──牧童──一笑──桃夭──秋の坊──及夢──可理──山陣──蘇守──希因──從吾──千代──珈涼女──すゑ女──見風──後川──可枝──既白──桃居──夢水──佛仙──閑更──一菊──車太──八水──馬來──蒼虬──松菊──鹿古──梅室──一抄──舉道──甘谷──眉山──李下──斗入──栗鳥──司驥──見推──晩籟──來涯──泯化──林紅──倚彦──方壓──抑土──麻父──二川──康工──吳山──千崖──野鶴──北陸線へ乘替え──鳴の浮巢──紫雲院來迎寺──松原神社──松原公園──舟の小さきに帆を上げて──湖にかゝりて身を清む──豐太閤が獻納せし征韓捕鐘──鐘の音聞かん香焚いて──古色掬すべき角鹿神社──芭蕉の鐘撞──永平寺に詣づ──橋本左内の墓──雨をかつぎて茶漬哉──れぶた流しやれ朝起きや──滿月を貸す──鮒汁──月影を浴する大銀杏を仰ぐ──朝日山莊の一層樓──水魚ぼく〳〵風涼し──隱れ家を臭ぎつけらる──曉の露笠涼し──宿帳を調べられて追歷らる──行脚の修養未だ足らず──那谷寺──登のともしの苔清水──翠色掬すべき萬松園──敦岳の句──腦貧血を起す──秋吊はんか僧はあらず

俳遊記目次 終

芳野山踏……三一八

林業水利等を踏査せんとて芳野へ入る──正式──正辰──正親──千里──宇古──米翁──月村──米仲──嫩草山の雨の鹿──春日山の明月──人車吉野川に沿ふて走る──御ン筏宿秋の雨──川上村の林業──鐘乳洞の探險に向ふ──洞中の光景──吉野山へ向ふ──一行の體量──暖押坂──四行庵──如意輪堂──神武天皇の祖傍山東北御陵を拜す──國平の作澤一の來歷を聞く──大坂着──堀江座の大隅太夫を聞く──築港内の巡覽



佐渡の旅

佐藤冷著

日かげ高くして東都を出で、月影借らずして越路に入る、見ぬ世の人は眞事とせじ、己れも旅の心地はせず、さて〳〵變つた世とはなりにき、去る七月十日より十七日まで八日の内は、島田、波多野、高木の三氏と、高田、柏崎、與板、新潟、葛塚、新發田の演說會及懇親會に臨み、同日諸

氏と袂を分ち、一旦新潟へ立戻りて、かねての所用を果せし上、いよいよ佐州へ渡りしは、十九日の午前十一時過なりき、此日は天氣朗らかにしてわづかにさは〳〵と船にあたれる波音を、夢に移して五時間に三十三海里は何の苦もなく打越えたり、佐渡は周圍五十里餘、東西十三里南北廿六里にして、雜太、加茂、羽茂の三郡より成立、人口十一萬戸數二萬三千、石高十三萬餘にして、氣候は極寒二十七度極暑九十五度なりとぞ、風景絶佳、國府川を境となし、其以北金北山につゞくものを大佐渡とし、以南經塚山につゞくものを小佐渡とす、其大體の山脈は粟島、飛島より能登を經て、羽前の鳥海山につゞくと云へり、國産には於ては金、銀、いか、佐渡魚、海苔、あはび、米、竹木、無名異燒、赤玉石、銅製物等なり、風俗は惇朴にして、女は京坂のやさしきさまにて、髪はしまだく

めさ、など專らにして丸まげは醫師、神主、等の妻に限れるものゝ如し、男は品ンありてもの事丁寧の方なり、能狂言、和歌、俳句、詩、文章、圍碁、等の流行するを以ても大概は推知し得べし、此如美事のさまは畢竟順德帝、資朝卿、又は日蓮上人など此地に移され給ひしより來れるなるべし、泪にむせぶべき古昔の事跡は、却て孤島の餘慶を受けにし事と思へば、感ずるものは彼れにつけ、是につけ、つゞれもさゝぬ旅衣、時にしられぬ村時雨、せきとむべうもなかりけり、今島中の要地とも云ふべき所を擧げんに、雜太郡にては相川、河原田、畑野、新町、澤根、二見、加茂郡にては、夷港、(二ヶ所を合せて一名兩津とも云ふ)新穂、羽茂郡にては、羽茂本郷、小木、赤泊等なり、こたびの演說會は、十九日に夷、二十日に畑野、廿一日に相川、廿二日に新村の金澤といへるに開きたり、何れもか

ならず懇親會も伴へり、はじめの三日間は新潟新聞社の小崎懋氏と己れとなりしに、廿二日は島田、波多野、高木、の三氏も渡航し來りしなり、會を濟して一統は翌廿三日に新潟に戻り、明くる日島田氏の一行は見附、長岡をさして出立し、己れは新潟の銀行家豪商諸氏に招かれ、一日後れて別に西蒲原郡に催せし演説會に臨み、歸途に就きにき、佐渡の演説會は聽衆の數を云へば、少なきは四百、多きは千五百又は二千、懇親會四十人より八十人迄なり、されど內地の思想を以て考ふべきにあらず、壹は手離しがたき稼人の集合所にして、場所も意に任かせがたきに、夫れにても錐を立べき隙なき程なれば、もし夜間ともし場所をも撰みたらんには、いか斗の數に上るべきか、政治思想の此地に深く根させしは、本居宣長翁が「鎌倉の平の子等のたはわさはそか

の馬子に罪劣らめや」と憤りし如く、北條氏の暴政の爲め恐多くも時の御上を此所へ遷しまゐらせ、有力家を流罪とし、首迄刎し事さへありしを、島人誰れ彼れとなく何れも政治上の罪とし知れば、人情の常として慨かでは叶ふまじ、其性質の失せでこそ立憲政治の浪風を、早くも悟りて人先に心を玆に寄せにしは、實に以ある事なりけれ、されば是より後の日も佐渡の島人夢な忘れぞ、舊蹟名區の存する事數しれず、就中順德帝の御船着け給ひし濱邊なりとて、一は新町といへるに碑あり、又懋か浦と云へるにもありて何れも眞野村を距る事僅かなり、懋か浦の碑には帝の御製を彫り付たり、「いさゝらは磯うつ波にことゝはん冲のかたには何事かある」と、幾度か仰ぎ見て濱の眞砂の巖となりて苔むしても、猶民草には飽足らぬ大御代しろしめさるべ

きあたりの御製かと思へば、寄する白波打かへす汀に書ける砂文字の消えも入りたき思ひ也、帝を祭れる眞野宮は縣社として眞野村に存し、又遙か高く老松鬱蒼たる邊御陵なりしに、官に於て維新の後他へ移させられしよしを以て今は寂たる跡をとゞむるのみ、己れは百年の後其さまの消えなん事を恐れ、古昔よりの事とも記し付けたる堅石の碑建立せでやあるべきなど、切に島人にすゝめ置たり、眼のあたりの事なれば畏けれども一句をものしぬ。

ひたすらに寒氣立けり夏木立

御陵の最寄に抱石梅といへるがあり、石を孕みて大なる梅樹となりしに由れり、今は其根裂けて石も近邊にまろばりてあり、梅津村、畑野村に苔梅といへるあり、何れも幹の廻り七尺餘にして苔むせり、其

幹とも根とも云はず苔の隙より花咲出ぬるより名付けしよしにて、梅は三本とも帝の御手植なりとなむ、別に小倉村に日蓮上人星下りの梅と云へるあり、同じく七尺程の廻りあり、鴨の湖水は兩津にありて周圍四里に餘れり、水飽迄清く砂明らかにして旅のやつれの影の移るも耻かし、度津神社は羽茂郡にありて五十猛命を祭れるよし、國幣の小社たり、日蓮、文覺等の舊蹟諸所に殘れり、寺院は中〳〵に盛んなるものありて多くは眞言と日蓮宗となり、眞言には小比叡山蓮華峰寺、國分寺、新倉山弘仁寺、日蓮宗には阿佛坊妙宣寺（日野中納言自筆の經文あり）塚原山根本寺等何れも大寺也、其他裁判所、郡役所、鑛山、教育の景況は今更に記すべきにあらず、只二つ三つ異れる咄しを書付なん、佐渡は日ましに道路も開けゆくものゝまだ徒歩か駕にあらざ

れば通しがたき所もありて、土地は一體に小石原のさまに近し、已れ折々駕に乘りしに別に夫れの營業といふものあるにはあらで、近邊の庄屋、醫師などより借り來りて用足す駕の事なれば、とんと東京にて葬儀に見るものゝさまなり、ゆられながらにどうやら寺へ送らるゝ心地せる折もありき、又片里に泊りぬる時はめづらしき風呂に入れり、小橋樣のものそと渡り、さゝやかなる戸を開きて眞暗なる内にそろ〳〵と頭を先きにし、やう〳〵に足を入るれば、ふく〳〵と木のうきたるものあり、踏むに從ひて其木が沈めば、わづかながら風呂の如き思ひせり、頓て戸をゞ息くるしうなるをよしとすと、定めて慣れなば子細なかるべし、又異なるは佐渡には男女共に一眼の人或は双眼明を失ひしもの多く見かけぬ、何が原因かはしらねど、近時錢湯の制

を改め内地の如く明はなしにせしに、兩三年來めつきり眼をやむもの減せしとの事也、尙一風別な土產となるべきは、金堀ぶし鑛山踊なり、踊はよけれど唄は以前手にて金銀鑛を堀にし時のものなるに、今は機械に仕事をさせる世の中なれば、數年を經ぬ間に自然とすたれて節なきふしとなりぬべし、此上は行先々の諸人に世話うけし事の忝けなきを一々揭げて禮盡すこそ道なるべけれ、されどまだ歸り着かぬ旅寢の宿、怪しげなるともし灯も、虫に取られむ恐れあれば、大事がりて障子を引き逃げ處なき蚊やり火の、煙たき憂世を禿れたる、筆にぼつ〳〵岩清水、洩れ勝にのみ大略を記して玆に筆をとゞめぬ。

（明治廿五年七月廿七日夜誌）

雪の旅

わづかな霜を苦に病て温泉場へ逃出す壯年あれば、丈餘の雪を常として荷物に汗する老人あり、東都と越路と所は變れど心の持やうひとつなるべし、落花の雪に踏迷ふ変野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも旅寢となればもの憂きとは、太平記中名高き文なり、彼と是とは時世が變れど、此旅此土地此大雪、彼の筆者に見せなば驚嘆すべし、直江の津迄は汽車が通ひ、信濃に名のある山水を硝子越しに打見やり、三月七日の夕、問暮善光寺の邊に着きたり。

雪晴や藍を流せし千曲川

挨拶もなくて炬燵の馳走哉

三月になりて五尺の小雪哉

此日は大隈伯の北堂米寿の賀宴ありとてかねて招かれぬるに不斗けふより旅人となりしまゝ一句を電信にて贈りぬ。

苦むしてたしかな梅の匂ひかな

八日は朝より雪ふりけり、夫れが爲めかねては直江津迄の汽車なるに柏原にて泊りたり、是よりは三人或は四人引の雪車に助られ、關川、太田切、關山、新井、などいへる村々を打過ぎ、十里程に十一時間を費して高田に着きしは夜の十時頃なりき、越後の雪は此邊と長岡、與板あたりが名物也とは承り居りしに、半ばそら事に聞流せし咄しも、さ

りとはいかゞあらんと見過せし雪譜も、今は中々に己れの愚かさを知りけり、實況は俳句に讓りて一々はしるさず、只淺くも丈には下らず深きは三丈に及べる雪と知らば誤りなかるべし、知友の一人二人同行ありたらんには如何に樂しからんなど、獨言しつゝ夜具引冠りぬ。

ふすぶつたまゝに年越す氷柱哉
よく見れば流れて居るや雪の川
やう〳〵に覗き出しけり雪の宿
十里來て鳥の音聞かぬ深雪哉
往來に轉してある荷雪車哉
雪に眼のはなれて月を知る夜哉

九日はよき天氣なりき、直江津迄は雪車なり、此處は大に雪少なし、夫より三里程の潟町へは拾ひながらも人力車通せり、柿崎、鉢崎、米山、青海川、鯨波、を經て柏崎へは何れも雪車也、

此處え出て二階家見たり雪の中
雪の山皆聳へすに並ひけり
日は暮るのか煙り立雪の家

十日は板びさしに氣味よき音ひゞきければ、さては霰かとむく起に窓を覗けば意外にも大粒の雨なりけり、不相變三人がゝりにて雪車の支度も出來たりとの事なれば、八時前出發せり、雨には道もいかゞあらんと氣遣ひしに一向にさはる事なし、里人の咄しには來月ならではおもふまゝには割り切れまじとなり、此邊は雪搔にはあらで

雪割と呼びけり、曾地、田代、宮本、を經て九里程を來て與板へ着きしは午後二時少し過くる比也、此往還は雪車に適せし道と覺ゆ、雨も二三里にしてみぞれとなり又霰と變りぬ、越後路にはめづらしき竹の打臥たる上を雪車のひたばしりにはしるさまなど中々に興あり、與板は柏崎に倍する雪にして高田よりは少なし、是より新潟へは信濃川を小汽船にて下るのみなれば至極樂なれども、既に發船の時刻後れしまゝ久しぶりにゆる〳〵足を伸しぬ。

眠らるゝ迄に馴れけり旅の雪車

雨ひと日雪はさながら雪にして

伏す時がそも〳〵つよし雪の竹

十一日は曉より雪なりけり、九時過與板を發し大河津、三條、加茂、新田、小須戸、白井、酒や、を經て新潟に着せしは午後三時なり、雪は午前の內晴れたり、十四里程を此時間にて達せしは下り舟の故にして、上りには三時間も多くかゝるよし、川筋の雪に引替へ、新潟市中は大に趣を異にし、雪も至て少なく又掃除も行屆たり。

雪の川何處にも岸はなかりけり

雪を來て雪めづらしき街かな

（明治廿六年三月十一日新潟の客舍にてしるす）

拾ひものゝ記

足洗ふ程の流れ持ちし家には宿りぬるも、帽子の塵拂ふ程の夕風には出逢はず、七月廿七日より此十五日迄滿二十日、三河、美濃、飛彈、をかけて立憲政體といへるものは斯〳〵ぞ、己れ等が取れる方針は云々ぞ、政府の爲さんといへる改革は覺束な、國民は一致して輿論の執行を努めよなど說き廻り、夜は早くして一時に臥し、曉には既に二里を來ぬと、語る中に三四吟を得しは、是ぞ拾ひものとや云ふべき。

三河國賓飯郡の蒲郡といへる海邊にやどりて

月かげや蚊屋に打込む波かしら

美濃國多藝郡養老村にて

瀧の音に別れて腰の扇かな

同し國の厚見郡長良川にて

稀に鵜を泣く人あるか長良川

飛彈國に入て

炎天やみどり爭ふ山と水

（明治廿六年八月十六日旅寐の窓の下にしるす）

ひまぬす人の記

衆議院は解散されぬ、近き朝鮮といへるには一揆起りて、吾邦迄も見ては居られぬ合戰とはなりぬとて、中々に取沙汰さはがしき六月七日八日頃不仕合なる岐阜の朋友が許を訪ひて、金華山の邊に小田の蛙の名殘を思ひ、細き月かげのひた〳〵とひたせる湖水の面には、翁の俤見ゆるばかり、左に宇治川右に山科、ひと日ふた日の内に東山の朝ぼらけ嵐山の夕けしき、ほと丶ぎすの音に飽き岩つゝじの色なつかしく、堆き翠の中に老鶯の二つ三つもる丶もめづらし、飛通ふ螢の木の間を透ける、賤が家のともし灯に紛れぬもをかしく河鹿の鳴けるを俳句に秋とせしは只の所を取りしなるべし、さるにても此あ

たりは霄の内より夜深き迄聞ゆる音に心すみて、いかにうれしきかぎりならまし、とはぬすみしひまの得ものぞかし。

長良川に夜を徹して得ものゝ鮎はしづかに數尾

簿火の闇になじまぬ卯月哉

嵐山にて三句

堆きみどりの中や岩つゝじ

所得たり山時鳥眞ひる中

まだ一度松風聞かず鳴河鹿

（明治廿七年六月十一日しるす）

雨の旅

昨宵よりの篠つく雨久しぶりの暑さ知らず、人は心地よげにうま〳〵と寢て居ぬ、今日は八月十日の未明、かねて約束せし對外硬派てふ大會の爲め、甲斐の府中へ罷らんとてむく起に內藤新宿の停車場へ走りつきぬ、此行は舊新見の藩主博直關櫻東、長門の江戸子育造大岡硯海、肥後の勇者友房佐々克堂、三河の剛の者重剛志賀矧川、武藏鎧の達者政之助加藤城陽、下總の朗吟家喜七小久保城南、武田流の兵術家義一藥袋藕所、豐後の住人壽一郎久保牛城、甲斐が嶺のドクトル保十郎前田孤鶴、及角田竹冷の十人なり硯海、克堂、城陽、藕所、牛城、孤鶴は洋服にして、袴羽織に踏がけの矧川と、浴衣に駒下駄の櫻東、竹冷、汽車

の中には晴雨なく、笑話の內に一時間を經八王子に着きしは八時頃なりき、凡人の只一人すら旅は笑種の多かるに、まして天下の癖者と知られたる此人數、談柄のなくてやはあるべき、何人か其先登なるべきとは誰れも心ひそかに期し居りしに早くも稠人中なる八王子の停車場近邊にて出逢しは一屬興味深かりき、同行者は昨日からの用意に馬車二臺は心任せとて乘込しに、一人矧川のみ見へざればいかにせしとて人をして斥候せしに、足早に戻りて申やう、どなた樣にや髭なく丸顏の色白男の子の肥へたるが、只今袴はづし羽織を丸め尻引からげ勇ましきさまなるに、不似合にも大雨の爲め雪踏はきたるまゝ思案盡きたる姿に立往生の御人あり、心當りは外には候はずと氣の毒げに言上に及びにき、夫れなり〳〵下駄よ傘よとて先々無事

に馬車迄這ひ込ませぬ。

夕立を脊負ッて立けり大男

馬車は進みて小佛にかゝりぬ、各々は下りけり、書生流を以て聞へし櫻東、大げんきに雨を突て峠を越えしは美事なりしも、實は駒下駄のまゝのぐしや〳〵登りは華族のお里が夫れにて知られぬ、旅は斯くこそあれと云はぬばかり、素足にわらじがけの竹冷如何に氣味よからん、只惜しかりしは二三丁にて雨の指破れて眞紅のわらし紐とはうたてし、茲はわづかの道程誰れが何を爲せしと目立つ間もなく、吉野と云へるに到れば、風雨のごた〳〵紛れに、硯海、矧川、の峠も馬車のまゝにて在りし事の現はれしぞ、人は上りぬべけれど世は下りぬとつぶやく氣質者もありにき、糸蓙十枚、足袋十足、番傘の注文も人夫

の支度も、わらぢは斯くしてさう結べば切れるまでは大丈夫と先一通りは要意屆きぬ、舊は健足なりしがとは克堂の前置、服は西洋去りながら番傘は日本、只の雨足を如何せんとは、少々險路當惑の硯海、わらじのはき樣裾のからげ樣迄他人の厄介、傘のさし方は下手なおかげに一圓拋ちし昨年の帽子は、當年の雨にて五十錢の價を增せし儲けものゝ矧川、拙者は、城陽歐米を股にかけし事あり、道中に於ては裏天の名は取消すべしとの一言、稍恕すべき處あり、大に氣焰を吐くを樂みとして長命疑ひなき城南の、昨夜椽先に轉ばりて高吟せし、英雄心緒亂如絲は、道灌の少女に對するのさまにはあらずして、今日の行路難の爲めの前徵にやと自ら訝る憐れさよ、藕所、孤鶴は我慢にも健足ぶるの義務あり、牛城は痩ながらも九州男子、劒舞の講釋は晩程可

仕と、兎に角追付て來ぬ、櫻東、竹冷は既に記せしにて推せらるべし、命がけに上野原に着きぬ、名物鹽あんのまんぢう是はめづらしとは腹のすきし爲めの心にもなき世辭、誰れも出よ彼れも來よとて眞裸にて一枚着をあぶらせる詩人、盥へ水、足も顏もきらいなき潔癖家、眼のあたり一句を得ぬ。

おもひ〳〵汗ふく旅の姿哉

暮かゝる日に加ふる風雨、馬鹿な直も云はれまじとは、藪所が舊郡長の餘威に下る營業馬車、辛うじて夜の九時に猿橋の袂に入りけり、宿は大黑屋主人は姪子顏、あちの片隅こゝの一室、茗を呼び酒をあたゝめしむるの聲急に靜まれば、有力家天野董平氏はじめ數十名の諸氏名刺を通ずるに逢ふ、はじめて待まうけられしを知る、よく聞けば

上野原迄も出迎はれしとか、旅といふ字に自らゆるす腕に到るの袖、格別のお暑さとの挨拶は座を亂せし言譯の意も能れるなるべし、鮎は煮べし否燒くべし酸にするこそ然るべし、酒はそちらラムネはこちら香の物は古きにしかじとは、道中の溜飲を茲で吐く宿屋の迷惑、蚊屋の低きをつぶやきし壯年いつの間にか鼾聲を擅まゝにす、ふとんの短きを語りし丈夫、半身蟲になげ出して前後を知らず、草臥儲けの身體には蚤も蚊もなし、戸に當る雨の大粒風を交へてもの凄き夜半過ぎの響き、突如として四筵を驚かす一大演說こそはじまれり、何事にやと樓の上下刎起るもの、かけ出す者、牙山の進擊もかくやと思ふ程に賑はへり、是他人にあらず音に聞へし、城南小久保喜七、宵の一酌只今醒たる處と見へ、突き起されし蚊に洩らす一公憤、喜七が明治

年間に在るを得しは、關八州は申迄もなく蓋し神州の爲め賀すべし、諸君疑ふなかれ眞個に之を信ぜりと、氣焔萬丈當るべからず、城南を氣焔博士と呼びなすは此時より始まれり。

氣のぬけた頃に寢られぬ殘暑哉

明くれば十一日脛を沒して越えし昨日の山坂程にはあらざるも、雨もあり風もあり名に聞へし笹子の峻嶺もあり、足達者には不足なき道中、右に天目山左に三日川、硬軍の打入勝沼驛、六派の結合石和の里、誰そや彼れやの雀時、群がり集へる人々の、最盛んなる歡聲に迎へられ、甲斐の府中へ乘込みけり、明日は懇親會演說會は十三日と聞て、おもひ〳〵に手足を伸しぬ、私は二十四歲にして明を失ひ、俄の營業ながら勉强は人に讓らぬ覺悟とは中々もの識の今出來の按摩、あの

人はよい身代でも、年は取ても何事が出來ても、私は子供の時から此道にかけては磨いた腕とは、二度目に來た年若の古ひ眼くら、今止みたる風雨明はなして勝手に月を覗かせ、廣〳〵とせし秘密知らすの松亭の二階、其くせ蚊屋に寄する波もなく、松に響く調べも聞へず、枝をならさぬ御世のありがたさに、寢付かれぬ程のむし暑さ、櫻東の腹の邊竹冷の枕元、足を加へて巫山に狂ふ剛の者、短かき程、よく聞ゆる淨瑠理の江戸子、同行一統評議の上朗吟家の冠を贈りし城南、一度聲を放ては涼動き氣爽かに、杜李も白樂も星巖、山陽、白石、龍雄、口を衝て出つ、城南元來感情深き男、名句佳章に到れば朗吟を中止して嗚呼是古今獨步の作と、嗚咽措く能はず、此美聲と此感情、聞く人の心をして涼氣に充たしむるも無理ならず、此時に又古今獨步博士の名をも得

ぬ、道中記中詳に解剖せは、矧川と城南を以て十分の八を埋むべし。

我まゝな人のもの也納涼臺

水竹八卷九萬松亭に待草臥れて一作あり、亂雲來又去、呑吐幾孱顏一醉尤宜趣、隔籬對夢山、眞に見るが如し、歸雲村上博及齋藤萬藏竹冷の知友たり十數年ぶりにて會す、歸雲元來詩歌ともに妙也、近作として示さる尺蘆寸石托餘生、狂受無腸公子名、愛汝猶存江海氣、掉擧時試小橫行、又臺國人心てふ事を、有たけの花日にむかふ葵かな、何れも佳に覺ゆ淺渥、田邊、八田、野口、加賀美、諸氏はじめ來訪者引もきらず、一行中克堂、矧川、藕所、竹冷の四人は、今日懇親會、前のようけものとして大泉寺に到て、唐の王維の書信玄の茶臼等を一見し、古城と云へるにも參りぬ、是は武田の舊城趾なり、臨み見るに僅かに二三千坪の平地の

み、人は城人は石垣人は堀情はみかた仇は敵なり、とは信玄の詠にして又信玄の眼中甲斐の山岳は是皆城壁なるのみ、二三千坪はたまたま城中の一居宅のみと云ふにあるべし、去て其墓所に詣で戻れば既に時刻到來せるに由り、前日來の暴風雨にて橋落ち道破れ來り會するを得ざるの有志十中八九、然るに尚三百の人を得ぬ、儀式は嚴かに擧げられぬ、硬派の趣旨は肅として決定せり、櫻東、克堂、竹冷の演說あり、席を改めて宴會を開きぬ、會主の辭あり矧川の挨拶あり、晩鴉公園を我宿として樹林を掠め、月輪影うすく金峰に掛る頃寫所に戻りぬ、鞭聲肅々は九州者に依て紹介せられぬ、仕込杖は急にひらめけり、壁の埃り茶器を沒し、洋燈將に倒れんとして辛うじて助けらる、婢は狼狽奴は周章、此事狂人の發作にもあらされば恐るべきの出來事にも

あらず、是なん牛城得意の劔舞、左思右考夫れには不及、先不取敢喝采する事となしぬ。

威風凛として聞く人のあり轡虫

櫻町の櫻座、やまと心を人にしらしむべき景氣よき名の芝居小屋、今日は十三日今や天地も崩るゝ計の大喝采、陛下萬歳帝國萬歳硬派萬歳は數千人異口同音、是なん演説中日清交戰の勝報を聽衆に紹介せし一大快事、牛城、城南、竹冷、城陽、矧川、硯海等の演説、何れも水を打たるが如き中に、時々潮の寄するひゞきして激賞の聲聞ゆるのみ、此地に於て此盛會一言のノートを耳にせず、萬歳聲裏に終局せしは誠に時勢にぞありける、硬派の候補者如何に決すべきか、夫れは秘事なり、扨は歸路の要意にかゝらんとて、不二川の雨後の出水明日は未だしか、

十五日までは待たれまじ、克堂は既に一人先に發しぬ、いざ鰍澤へ問合さんと電信の往復數回、いよ〳〵陸路見坂嶺を越ゆる事に決せしは夜の十二時其まゝ支度に移りぬ、ぱち〳〵と手を拍つひゞき、下婢は世わし氣にかけ廻る中に、明日もたしかに天氣かとは矧川胸に一物あるの問ひぶり也、勿論ですとは番頭より取次での答へ、櫻東、矧川とゝもに蚊屋の中に在るは只二人、抑ひぼんの下心一日がまんして經驗の爲め不二川を下りたしと、兩人が聞へよがしのひそ〳〵咄しは、一人が華族で一人が詩人、明日は御嶽へ登り、其明くる日は寐て居て滝車迄行かるべしと、本音を互の腹の中に吐きつゝあり、見て取る硯海だめ〳〵竹冷出かけやうか、知れた事さと應へを爲し、城陽、城南、牛城、は早く既に旅裝を整へて門に在り、硯海、竹冷、同行五人こと〳〵

との登り道、黒駒と云へるに達せし頃夜は白〳〵と明けはなれぬ、是からは固より腕車は通ぜず、又折あしく駕一挺なし、いかゝしき野馬を並べて、十四日の旭を横に峠に向ひぬ、茲に於て城陽大得意、前年北海道の旅行予か肥龍を顔色なからしめしは此技にありと云はぬばかり、されば むさし鐙の達者とは名けられけり、一言半句なく耻かしからぬ身體の立派、今は之を持てあまし只荷鞍をとらへて峠に着き、はじめて口を開き君子は岩墻の下に立たず注意すべし〳〵との負惜みの言ひ草に城南なるを知る、硯海、牛城、竹冷、兎に角安着、下りは徒歩、川口の湖水に贅澤な晴天の富嶽、舟を上れば吉田迄は馬の脊を借るべしとは稍經驗の心得顔、内心は平地を恃みての勇氣、盆は田舍のひと賑はひ、一昨年の手織今年の仕立、かんじよふな代りに朝から汗

の單物、駒下駄は十錢でも黑ぬり、白粉は一袋貳錢ながら打てばはげる程にたつぷり用ひ、髮は一月以來はじめて櫛を入れたりと覺ゆ、三々五々大道狹しと手を携へ、往來に咲ける七草の、花色々の夕まぐれ、遙かあなたに人山を爲しわめくもあれば罵るもあり、笑ふ中から辛うじて無事なり〳〵と這ひ出せしは城陽、憐れや此眞直中へどうと落たる鐙博士、道中達者に恕せられし裏天の名の取消しは、茲に再び墨くろ〳〵と頂戴しぬ、馬車貳臺に五人と荷物、御殿場へ着しは夜の八時過ぎ、飛込むと動き出す程に迫りし滊車の時間、四人は新橋に、竹冷は藤澤に下りてかまくらへ廻り、兒島惟謙、富田鐵之助氏等を訪ひ、逗子へ到りて大島貞恭氏の病を見舞ひ、十六日に庵に戻りぬ、櫻東、矧川の便りは如何に、氣の毒にも此兩胸算家はからり目的がはづれて、

十四日も川は開かず、といふて十五日も十六日も滯留迄の勇氣はなし、漸く峠の途中に泊り、江戸を見しは十六日なりしとぞ穴賢。

十三日より夜を徹して十四日の曉

浮世知りぬ頂た露踏た露

歸庵

大空の掃除屆きて秋高し

（明治廿七年八月十七日しるす）

露の袂の記

秋深くそゝろ寒さの曉、雨は心ありてか出ぬ内に旅情を起さしめぬ、日出國兮有名寶百練精鐵所鍛造今に於て思ひ出すも事新らし、廣島は畏こくも大御旗を進めさせられし處其軍事費を議する爲めの旅行、風蕭々兮髮衝冠雨はものかは、請看日出男子膽そゝろ寒さは昨夜の夢のみ、見送らるゝは神田區の有志數十、遠州中泉へ着きしは午後二時半比にして、京地を發せしは一番滊車なりし、政友寺田彦太郎翁は七十三九尾代議士の齢に增す十、明治廿七年十月七日なる今日は、翁か送別會及演說會、兼てはこたび千四百の黨員を一時に得し、翁か撰擧區の政務所設置の披露式ありて、若大隈君、島田、高田、田中、首藤、

遠藤、片岡の諸氏と同行し、何れもの會に列しぬ、海道に於ける二老政友を得しは我黨の名譽なり。

黄菊白菊我ものにして見る日哉

八日は朝の内小雨來にけり、昨日は人に醉ふ程の盛會、小降は寧そ心しまりてましぞかし、島田、廣住、片岡、の三氏と共に豐橋に着きしは壹前なりし、中泉にて靜岡縣の代議士と會合せしに、松島代議士の母人は昨夜病革まりて遠く行きぬと、態々遣はされしは胸せまりて返書も思ふに任せざりし、丸尾翁は寺田翁と語ふ事ありとて其儘に此所を過きりて參りぬ、豐橋は三浦氏の後を受けし高橋小十郎氏の選出地にして、政友大口氏の前夜より催されし高橋氏出發祝の宴會ある場所なり、壹の煙火夜の煙火中泉もこゝも巧みを極めぬ、宴會は濟

みぬ、喝采に送られて高橋氏と共に一行の滊車は名古屋へ運ひ着きぬ、小十郎氏の老練にして沈着なる奥ゆかし。

上りきる迄は開かぬ花火哉

九日は晴れけり、午後四時過ぎ大坂にて一行と別れ兼て約せし同地の柿崎氏と會合せり。

十日も晴天、朝の内神戸へ着きぬ、直に兵庫の常盤花壇にて開かれし改進黨の臨時大會へ臨めば、近縣は云ふも更なり全國各地より總代を出し、式は鄭重に擧げられ尋て懇親會は豐かに終りぬ、此地へ大會を開きしは目出たし。

初潮の今日はとゝきぬ港川

十一日もよく晴れたり、午前より神戸にて演說會を開きぬ、己れは

昨夜こゝな醫師に口中の療治たのみし程なれば、早く出て聽衆に挨拶ばかりの談話を爲し岡山へ出發しぬ、高田、首藤、片岡、の諸氏の外に鈴木と云へる方もあとより見へけり、此夜は恰も十三夜にして、天下に名を知られし後樂園中に、旗翻れて搆はぬ片月見も異域に在る軍人の事思ひ起して、感慨こも〳〵到れり。

後の月我腸は無事なりや

十二日は午後迄に尾の道の淨土寺に開かるゝ對外硬派の大會へ臨みぬ、晴れ〳〵とせし冲合に映ずる煙火は谷子爵の大唱せる陛下萬歳陸海軍萬歳硬派萬歳の聲に應じて勇ましかりし、千光寺は名を得し巨刹にして多田滿仲の宿願によりて再興せりとぞ、市の後山にありて獨山巓には千疊敷といへる平地あり、杉原民部太輔の城趾存

せり、是へ上れば四國を眼下に見るを得べく、吉備第一の眺望たり。

ぽち〳〵と黒き四國や浦の秋

十三日晴天、壹過廣島へ着、沼田郡三篠村大字新庄といへるの醫師須摩豐吉氏方へ寓居する事に決しぬ、此邊は市中の煩を避けて閑靜極まりなし。

落着くや先つ夜の長い家に來て

十四日晴天、何くれとなく世話しくれられし郡長瀨戸山長祥氏は早天より、又私も此程江戸より出かけ朝鮮へ、或は支那へ渡航する心組なりとて尋ねらるゝ知人の數多見へたり、昨日着せし以來議事に先たち選擧事も、陛下の大御心を感謝すべきの奏議も、陸海軍人へ謝意を表する決議も、政府へ注文する建議も、仲間の相談に上りて、平和

なる戰爭準備のかなりに開はしき事なりし。

十五日晴天、早朝より大本營へ罷出天機を伺ひ奉れり、申すも畏き事ながら、大元帥陛下におかせられては、早天より大本營へ出御在らせられ、夜に入り御退出後も、偏に國事に御心を傾けさせられ、十時頃よりは壹の內伺出られし者等の姓名一々御點檢の上、十二時過ならでは御寢所へ入らせられさりけるとかや、遙に洩れ承り侍る。

尊うとさに露の時雨るゝ秋哉

衆議院は當日召集日なるを以て、午前十時迄には不殘集り、はや正副議長の選擧に掛りぬ、此日三百の議員中不得止事情の爲め欠席せしもの僅かに貳人のみ、開票の結果議長に楠本副議長に島田の兩氏當選、硬派萬歲の喝采は暫く堂を動かして止まざりけり。

帆柱の並びし秋の港かな

十六日は朝曇なりしも間もなく晴けり、議院は正副議長を披露と各員の番號部分を爲すのみにして散じぬ、少しの間に多くの事を知らばやと匆々にかけ出し、病院へ到れば長與專齋、高木兼寛、渡邊驥諸氏に逢ふ、島田孝之、金岡又左衛門、内山正治氏等と共に、石黒總監の案内にて詳かに聞くを得、見舞ひし甲斐ありしを悅び、辭して直に宇品へ出で、吳軍港へ渡りぬ、修繕中の松島號比叡號を委細に點檢し、我同胞の肉飛で甲板裏に附着し、骨碎けて機械に箝し、毛髮船體に喰入て今に殘れるを見、其說明を聞く毎に切齒に堪へず、公憤せざるものなし、此激戰中知友向山松島號副艦長の無事なる顏を見、思はず互に手を握り暫しは暗涙に咽びぬ、寓所へ戻りしは一穗の燈影幽かにして、

月代紙障を浸すの比なりし。

秋風をよく呑込て戻りけり

十七日はぱら〳〵と朝の内雨來ぬ、此あたりは九月の末より今に至るも一滴の降るなく、待かねぬる折からとて、村人に珍重がらるゝ聲も届かぬ間に十つぶばかりしてやみぬ、瀬戸山郡長は可部町に住はれ四里の餘もあるべきに、心遣ひして見舞呉らるゝものから、今日は是非に訪らはゞやと盞のものなどそこ〳〵にしたゝめて參りぬ、主人は心待の樣子に兩三輩と家に在り、取交せての咄しにいつしか時移りてうしろの山に日かげも逃げ行けば、明日は開院式もあるべくやとて歩行にはまずべきやを疑ふ程に腕車をかりて、先刻より友松虫の殘れる宿へ立戻りぬ、茲に寓せしてのかた夜は十一時に臥床

に入り、朝は六時に起出ぬれば、東都の住居と全く異りて此程の心のすかゝしさよ。

白露に馴染て無事なからだ哉

十八日晴天、開院式は午前に於て嚴かに擧げられ畢ぬ、麗はしき龍顏を拜し奉りて、大かたの用事は濟みし心地せられ有がたかりし、此祝ひ日こそと思ひ立て急に宮島へ渡りぬれば、まだ足元の明るき位にあなれば、不取敢寶物、額など巡覽しぬ、汐と月は十時にあらでは、との事に、紅葉谷といへる處の旅館へ投じ、志願の月と汐と鹿の聲に逢はゞやと語らふ内に時刻到りぬれば、廻廊よりせば月既に山を離れて金波を脚下にし、小舟に掉さして大鳥居の方よりせば、殿廊恰も水上に浮ふが如く、數多の燈火波間に躍りて光景云はんかたなし、一々

筆に盡さんと企てんは中々に愚かなり。

照る月の流れ込みけり椽の下

十二時過くる頃もどりて打臥ぬるに、異な聲の枕邊にひゞきて淋しがらせにき、戸の透よりそと覗けば壹の内友とせし待こがれし鹿にぞありける。

物遣つた鹿に旅寐を知る夜哉

十九日殘月を踏み流れに臨みて嗽ひせる折から、昨日道にて逢ひぬる市島、高木、内藤の三友人もこゝに泊り込みしとて名乘出ぬ、魚住氏もありて思ひよらぬ咄し聽けり、天氣に任せて疾く舟を急がせ議院委員長の選擧にぞありける、又昨日の御勅に對する奉答文は、各派より一人づゝ出し、委員を設けて起草せしむるこそ、此際の仕方なる

べけれとて、硬派軟派など區別せずなりしぞ、一時ながらも同し色なる秋のからにしきならめ。

秋や深し槻紅葉に蔦紅葉

廿日廿一日とも晴天、政府案中朝鮮へ渡航する事に關する勅令を不承諾とせしのみにて、壹億五千萬圓の軍費をはじめ、上奏案、建議案、決議案等も此兩日中に可決しぬ、廿一日は淺野侯より園遊會の招待を受け、廿二日は開院仰出され、式濟みて御酒賜旨の御沙汰ありけり、兩日とも何れも場所は泉亭と云へるにぞありける、こゝは古く御泉水と稱へ來れる處にして、福島正則の創設に係り、淺野侯の祖先が完成せし古色掬すべきの庭園なり、鏡の如く清める水面に夕陽を負うて移れる、三々五々の人影、折々はねる魚に動かされても其形ちの紳

士たるは失はず優に秋晴の味ひ得も云はれじ、此日の朝の間に子供心を起し、重野成齋翁と寓所の近傍なる新庄山と云へるに茵狩を爲して興深かりし、蓋の隙には見舞殘せし將校の負傷者と、俘虜の病人を訪ひ、松方伯、稻垣滿次郎氏等と落合ひ共に狀を盡すを得たり、日沒頃よりは春和園に有志の催せる懇親會ありて之にも臨みにき、さてもせはしかりし日なりし。

茵狩や今日一日の里蓋

廿三日は朝の內曇りて稀なる寒みを覺へぬ、山口縣周防國玖珂郡岩國は名に聞へし錦帶橋のある處なれば、いでや一思ひに走らんと て未明より腕車を驅り、十一里餘り午後一時に着ぬ、此町は戶數八百、人口三千ばかり、士族町と町人町と判然區別ありて、蓋の如くにして

動かず、高名の橋は元來凌雲橋凸四橋と云へりしよし、然るに川の名を錦川と呼べるより錦帶橋の名を得ぬとの事なり、橋は百二十五間にして幅は貳間半、中央太鼓形のもの三つあり、兩端平橋にして三つのものの抗なく、小なる橋臺を以て多くの抗に代用し、兩端は常の橋の如くせり、水極めて少なく僅かに片隅を流れつゝあり、されど一年に兩回程は殆んど橋臺を沒せんはがりに出水せりと、川に添うて西方に一山あり、横山又城山と云ふ、松樹工合よく茂りて頗る愛すべし、紅楓櫻樹なきの嵐山に似たり、近邊隈なく探りて同所に一泊し、廿四日寓所に戻りぬ。

橋下に日影殘りて秋の夕

廿五日未明廣島を發し夜に入り播州舞子の濱萬龜樓へ投じぬ、箕

浦、木暮、の兩氏汽車中に落合ひ波枕を同しうせしぞ幸多き、朝はらり日入てざあ〳〵と雨を得しぞ、廣島の公務果てしにもよるべけれ、朽木の田村氏も此宿にありとは意外の儲けものぞかし、詩話俳談夜は深くなりぬ、盞の内田口、橋本、稲葉、の諸氏、途中にて一人殖へ二人殖へせし同じさまに減りぬる時、須磨にて橋本氏が別るゝとて。

關守も千鳥もあらぬ須磨の浦
　君が寐さめをとふ人や誰れ

とものせられ佐瀬熊鐵ぬしも一詠ありしが、あまりに趣向の新たなりしが爲め頓に忘れぬ、夜具引冠りしと思ひしが、戸をくる音に眼覺めて廿六日となりしを知りけり、雨はしきりに降りけり、己れ去る廿二年の春頃、魚住氏の案内にて此邊をうろつきぬる時、此家にて、

こゝは春風のふく、べき處なり

とものせし事あり、此晩秋の雨に、高き邊に上り見ば味ひの如何に深かるべきなど、春風の事おもひ起して急に人丸社へ詣でん心の動きぬ、友を待たせて瀧車の時間をはかり、雨を衝て扨は貳人曳よとて腕車を明石へせかせけり、到り見て一句を得ぬ。

秋や暮ぬ霧に名を得し浦の雨

他と別れて己れは大阪へ着ぬ、去る九日柿崎氏と打合せし所用をかねてなり、同氏は急用出來ぬとて長崎へ行て留守にてありし、

廿七日朝薄暗く晝からよく晴れたり、むく起に奈良へ到り日暮し狩り盡しぬ、今更詳かに記さんもうたてし、前原嚴太郎氏と東道しぬ、瀧車中にて田村氏にも草苅氏にも逢ひぬ、夜に入り浪華の花屋と云

へるに戻り着ぬ。

泣足らで日は暮れにけり奈良の秋

廿八日晴天こそ幸なれとて、早々京都へ出圓山の儀屋へ投じぬ、半日の閑を偸み旅の記大方を草し、壹からば秋の御室、まだうすかるべきも高雄の紅葉狩らんとて出ぬ、御室は此頃三年來修繕屆きて少しく仁和寺の昔を偲ぶに足りぬ、高雄は心なの道普請、御室の下より一里半程は徒歩ならでは通じがたく、紅葉時の季節迄には迚も間に合ふまじ、京の人は氣の長き事にぞ侍る、高雄山神護寺は幽邃限りなく、稀に鳥聲の音づるゝあるのみ、觀楓の場所は清瀧川及地藏院の邊を最とす、時猶早けれども二月の花よりも紅なるもの處〳〵にはさまり、千百の楓樹中に就て青葉も亦顏せあるの趣を添へぬ、留主守る僧

に一枝を得、とぼ〳〵とせし足元をてらして、圓山の宿りに歸り着けば、めづらしかる世辭を桒りに棒になりし兩足を投げ出し、九連城に功を奏し錦を着て戻りし程な紅葉見の魁せし物語して聞かしぬ。

御堂寂て峰に日を經ぬ紅葉哉

廿九日卅日は流車中雨を聞ながら、知友の代議士數多と、兵士の爲めに時の後るゝをしのびて新橋へ着せしは、三十一日へ手の屆く時刻にして八代洲河岸を過き、一つ橋を渡る毎に、遠吠の犬なつかしく、家居近つく里心、無事を互に聞かせ合ふ、咄しに花の咲く程に、座ぶとんまでがあたゝまりて、起より鷄に臥戸に入りけり、明治廿七年十月三十一日夜深く枕邊に珍寶かる矢立の硯に便りて圓山に記し殘せし稿を終りぬ。

申酉の旅十日

ひつかくと云へば申に縁ありて旅の記などによろしく、筆を手にとり年とせばいよ〳〵めでたしとのはし書は、ちと文もひねくり趣向もあり氣に聞ゆれど、こは暮れを逃げ一月のお辭儀を頭痛に病みし十日間の旅の記のみ。

◎申十二月廿八日晴天、午前七時廿五分新橋を出、小田原にて升本別莊に憩ひ、人車鐵道といふものにて熱海の相摸屋へ着せしは午後四時過にして、召連れしは榮子、四三子、千枝子、の三人なり是等は乳呑子にもあらず又腰曲りにもあらじ。

年の暮父母は先年身まかりぬ

◎廿九日晴天、先つむく起に入浴後佐々木東洋翁の別墅を訪ふ、席に長與專齋翁あり、三人鼎坐主人禪を說き專齋文を論じ予俳を談ず、醫者臭からぬ机の廻り、南受に背を暖め時を移して辭し去りぬ、午後よりは東洋翁外數氏來訪夜に入り十一時頃より大雨大雷。

心地よや天地煤掃く夜もすがら

◎三十日晴天、三澤芦水子は俳諧執心の者なり、朝まだきより來訪疑を質す事密なり、又津輕の木村横斜子より冬季百吟到來、中に就て二三句、

公園や落葉の中の躰量機

榾の火に汽車といふものゝ咄哉

珠數買うて師走の市を通りけり

躰量機の俳句より思ひ起し、嘯氣館に到り各々はかり見るに、

一五二、　一二五八二　　竹冷
一九一、　二八九五六　　榮子
一一二、　六九五六六　　四三子
一一四、　八二七〇二　　千枝子

豐かなり妻は寒氣に見えずして

の一句は十九貫百目より得たるものの旅なり〳〵、夜に入り西園寺龜次郎氏來訪、玉突主人池田金作氏も參る越路と播磨とは自身の申す處、鳴戸、五所櫻、鈴ヶ森、涙にくれしといふた婦人も。ありしやうなり。

◎三十一日晴天、八九丁ばかりなる梅園を訪ふ、知る人數多に逢ふ、花は四分通り咲きぬ、重ねて訪はゞ八九分の見頃を得んと、二千株一

眼に又の日を樂しみて山房を下りぬ。

大梅日梅か香なんど誰か知る

寓所に戻れば机上には

怠りの思ひ出されて年の暮

とは肝付兼行氏來書のはしの一句又

子供等は面白がりて年の暮

沸過て居るはかり也除夜の風呂

とは間官辯霞氏が繁劇中を來書に洩らしたるもの、また

年の暮我も俗殺せられたり

とは佐藤飯人氏が蕪翁發句拾遺集の請書を促かるゝ手紙のはしの句なり、あゝ茲に迄年は暮れ込みぬ。

◎酉元旦快晴、早天同行者打揃うて初日拜みに高き所に登る、海を前に山をうしろにそよ〳〵と冷たき風の顏を掠むるは東風と名づくべく、眼下の松竹にうすくからひもの霞とせばよからん、雞の聲は先刻承り若水は風呂の中で濟まし、屠蘇を用ゆるは追てどてらの上に羽織など引掛ての事ならんと、氣の置けぬ、懷手、思案も苦吟もせぬ間に、夫れは〳〵ありがたく美しく、ゆら〳〵とお日樣の大きやかにめでたく昇らるゝに、おもはず眼は閉ち天窓は下りぬ。

初日影此時胸中無一物

屠蘇雜煮は旅ながら太箸の心丈夫に濟まし、舊知己たるふじや隱居、石渡月潭翁、幷に其若主人及露木朝海老人、其他追々來賀、

松に梅に水仙さして今朝の春　月潭

今朝になりて滅さり梅の笑ひ哉　同

春立や松さへも眼に新らしき　朝海

初霞錦の浦の人を懷ふ　知十

初日影磯の鳥は何と鳴く　同

初日昇る事三尺にして我起つ　牛伴

去歳のまゝ詩集取ちらし明の春　露石

雜煮五椀祖父七十七にて候よ　同

逢萊の夜は密柑より明にけり　横斜

老猿の今年もひとつ舞んとす　野老

初日の出まはゆさに手を合せけり　桃溪

元朝や先眼に入るは富士の山　赤瀨

打上る波も磯馴れて松の影　青宜
松島や松を洩らさぬ初日影　春水

月潭朝海は熱海の人、土地の氣候其まゝ眼に見るが如し、知十牛伴は江都の文學者と洋畫家、露石は大坂の文士、横斜は津輕の人、何れも新派の達人、野老は石の卷の辯護士、此句全く平常と異りて特に耳新らし、桃溪は沼津の醫師、赤瀨はおなし所の彩紅廬主人なり、不二の句は同庵所見の第一たり、青宜は東京、春水は伊豆、二句共に勅題を詠ぜしものとす、置郵の便は旅に此賜物を得ぬ、年賀狀の種類多きが中に五六の眼先變りしものを擧ぐれば、砂川雄峻氏の金文字、喜谷市郎右衛門氏の金地、橋本省吾氏の金枠はいかめしく、落合直文氏飯田安治氏の和文うるはしく、田口卯吉氏の朱の二重枠はめづらし、永坂周二氏

の朱紋摺地、霞峰氏の其姓をはつとりと假名文字にくづして、三分の一の空色を見せしなど、中〳〵に凝りたるものなるべく、小波氏の一字を加へず紫紺もて巖谷季雄とのみ端書の裏にものせしは、只年頭に持參せし名刺と見立てしなるべく、是は如何にも飛離れたる思ひ付なり、紅葉氏の朱の二號字にて年賀の詞書下し、右に五號字にて年月日を一字下りにし左に町所を割りて其下に尾崎紅葉と記したる、全く雜誌の表紙たるべし。

◎二日晴天、　京地に急用ありとて元日は予を迎んため南條、阿部、の兩氏見へ、又鈴木氏も追ひかけ來れり、二氏は即日歸り今日は鈴木氏戻らる、予が始めて父に伴はれて熱海へ入浴せしは、八九歳の時にして慶應元年頃なるべく、再び參りしは明治五年にして、次は七年と八

年となり、只獨り永く相摸屋に逗留し、月潭、朝海、及乾坤舍素丸氏などいふ何れも老輩の人々と、度々俳席を開きし事あり、此地にて故岩倉右府に謁し、「動きなき巖ありての清水哉」の一句を呈し重ねて召されしは十六七歳の頃なりしと覺ゆ、今はすゝろに當時をおもひ起し、月潭翁の若主人辨一氏と共に其頃の因みある湯前神社へ詣でしに、楠のいかゞしき板に俳句をしるし付けて、社殿に掲げたるあり、地に、

表

湯前の神社へさゝぐる折句

いたづらに月は宿らず軒の梅
廡の葉に立秋風や御稜川
稲妻や天氣定めて夕附夜

竹冷 まひら

裏

明治八年於熱海溫泉場

相摸屋認む

聽雨窓主人

折句は伊豆の熱海いでゆを春夏秋として作せるもの、今より見れば凡句の極み汗顏の至りなり、人はいふ今日でも凡作者なりと、恐縮〳〵夜に入り旅中の新年何ぞ慰むべき事のあらんと、數奇者を募りしに、手品するものあり、講談を爲すものあり、義太夫長唄一中ぶし、月潭翁掬月子など見へ、内藤、藤田、中橋、早川諸氏の家族來會、夜更けて興は盡きざりし。

◎三日晴天、此邊にて眼に立つべきは子供の澤山なると、其一月遊びのはち卷したると、いづれの道路も小石原なると、雁皮の織物の同じ趣向のみなると、大湯と湯元のめざましきと、梅園の路あしきと、三日の夜に子供等の門飾を取集るさまの騒がしきとなり、佐々木東洋翁始めて俳句を爲したり、ものにならんには大に研究すべしとあり、例の熱心もて進みたらんには熱海に他日一の大家を得べしと思はる、

殊勝なり朝湯の後の雪景色　東洋翁

是意中其まゝに打出せしもの殊勝なりとはおもしろし、予は歸京の上俳書數種を送る筈なり、希くは好伴侶たれ。

◎四日晴天、昨夜は十二時頃降雨、此地都合よく夜の雨晝の天氣、從

ふて土地の人の氣候自慢も一入なるぞをかし、今日は久しぶりにかるた遊びを催し、鹽谷、久保田、鹽入、笹川、姉崎、淺田、内藤、三澤、外に宿の者及予等の家族一大合戰始まれり、髮の亂るゝ指の血になる、忽ち婦人の丈夫を見出し、男子の大失敗にへコムを憐むなど、目的通抱腹絶倒。

松の内成人したる子供哉

◎五日晴天、東京より急電一時に數通、さらば思切つて明日は出發すべし、名殘に梅園訪はんと同行者は大かた此程來の人々、到り見れば、かねて三十一日におもひ殘せし如く八九分の盛りとはなりにき、先刻より假りに牡丹臺と名付くる園中の高臺へ坐を占め、村の子等に驅けくらべ旗奪又は角力など取らせ、或は大供の遣羽子あれば、連中齋藤氏が始めて小鳥射落し喜びて涙を出せしもあり。辨當の風呂

敗或は肩かけ何でもございと押しひろげて、かるたを始むるあり、人の知らぬ間にむすびほうばりしもあれば、義太夫の所望を受けぬ爲めの不平家も見へたり、黐燈頃寓居へ戻れば横山冬月氏の待受けたるに逢ふ、遺憾なく草臥れて枕に着きたり。

◎六日雨天、午前八時十分發の人車鐵道にて小田原へ着せしに、二時半の汽車は一兩日來發せずとて例の升本翁の別莊にゆる〳〵足を伸し、小峰の梅花二三分の處を訪ひ、四時半に國府津の汽車に乘り込み九時頃草庵へ着せるも、草鞋脱ぐうるさみもなく、早速只の風呂に飛込み、今更に避寒の地は熱海〳〵といひつゝ膳に向ひたり

一月の寒さは椽の廻り哉

（酉年の一月七日白粥食ふた暖みを借てしるす）

麥稈帽子

乾坤無住同行二人とは、よしの見せうぞと讀まれし、檜笠に童子となりし萬菊丸を供せし風羅坊が筆のすさびなり、先たのむ椎の木持ちし事はさら也、我を淋しがらせよと、閑古鳥にうきを告げゝん寂しみを味はへるにもあらで、五月雨に反古ばりなどへげし壁繕ろひもあへず、夏衣の虱振ふすべは固より、枕元に馬の尿するは今更にも云はず、菅簑と檜笠は越路と木曾の名物、柱にかけてと迄は到らざるも、麥稈帽子一つ輕きわが世の瓢の尻すわらぬ命かけ橋や、蔦のからみし跡は訪はずも、芋洗ふ女に興する邊の風味は得べしと、露ころ〳〵ふはり〳〵と或時は庭掃て出る寺男にもまぎらはしく、又は鍼顔に

拜殿に月見し信者ともなれりける。

武州高尾山

蟬の聲山は攀づべきものならし

白雨一過神靈茲にあらたなり

太師河原平間寺

鰐にや鳴入る蟬のしがみ付く

大雄山最乘寺(道了)

夏木立物の怪つきし人に逢ふ

問道に老婆の寢たる殘暑哉

大山雨降神社

御明しの燈籠ふすぶりて秋暑し

秋立や鶯の聲ほがら〳〵

上毛の榛原にて

萩に濡れ桔梗に染みて敢て手折らす

同榛名湖畔

肌入れて霧吸ふ鮒の膾哉

(卅年九月下稿十月五日の太陽)

月の瀬より

拜啓少しばか〳〵と致候陽氣六七日も打過候はゞ旅は屈强と被存候、然るに小生出發前より風邪やりそこね、今日只今迄取付かれ居り困入候、御地は如何に候や此程よりの日記左に御披露申上候、

◎三月一日午前七時廿分發春水子鮨辨當用意品川迄見送られ、車中は舊知己赤松中將と談笑の中に沼津へ着せしは疊過に御座候、同所には他石、二香、在明、方宜、談如、松鶴、二柏、箕亭、夏泉の諸氏在りて直に排頭吟、折句、連句、混戰中へ近鄉より俗用の爲め詰掛候連中と入亂れ候得共、內用と御承知御聞流し被下度候、

◎翌日も又翌日も逗留、三日の夜十一時四十二分と云ふに突然出發、

名古屋、龜山にて乘替、四日の正午頃津市中新町浦香兩方へ着仕候、沿津を夜逃げせしと、津市にて居所を世間へ知らせざりし手際は少々跨るに足るべきか呵々。

◎八日迄は臥床ながら時々出掛申候、元來此邊にては本居翁と拙堂先生の學者たるは誰も知り候得共、今より七八年前八十七歳を以て死去せられし、生川春明翁の偉人たる事は知る人稀に御座候間、小生は年來尋跡相尋ね申度存居たるに、幸ひ津市に滯留中親しく其孫鐵之助氏に面會せしに、不圖緣故ある人なりしより萬事都合を得種々聞くを得又遺物をも實見致し候乍去例の俳諧大系圖の末尾に記せる近刻書目の中編下編別錄等の草稿は總て散佚いたし、奇跡職人考、好間奇賞、俳諧古物語、伊勢あみ笠、好間漫錄等、同斷只幾かに近世女風

俗考は、明治廿六七年の交大槻如電翁の盡力にて世に紹介せられ候得共、晩年心をひそめ候輒の礬き百卷は、門弟阿保氏へ草稿の儘貸與し、其他言靈に關する著書、寫眞に關する著書等數多あり、其斷片の現に殘れるものあれば、小生は翁の筆跡遺物保存に就きて大に助言せし義に御座候、古短冊數葉古藏書の一部と翁の筆に成れる一冊は之を小生へ贈られ候に由り永く珍藏すべく歸京の上は御披見に入れ可申候、尤も短冊の內一葉は大兄へ又一葉は洒竹兄へ贈るべき心算に御座候。

◎又或る日八幡兜蟀、八木正吉兩氏の案內にて、平治か阿漕塚と翁の「月の夜の何を阿古木に鳴く千鳥」の碑、鷺崎、磯山、あの丶松原、阿漕か浦、藤潟山、加良洲の松原、結城神社等巡覽、此日の景物ははじめて雲雀聞

候事と、阿漕か浦にて馬刀掻きたるとにて候、「秋しらぬ松の黑みやからす崎」とは素因の句にして、其他何れも古歌俳句に謠はれ候場所に御座候、結城神社は太平記に相見え候藤原宗廣朝臣を祭れる別格官幣社にして、此社をぬけ出候はゞ藤枝といふ町にして其所の山半と申候方の庭內に珍らしき古梅數多く蓄へ樓內には拙堂、萩翁、對山等の筆おもしろきもの御座候、又阿漕燒といへるもの有之四三子の計ひにて俳諧にちなみ候もの少々燒かせ候よし只今聞知り候間、出來候へば持歸り社中諸氏へ一つ宛は贈り得可申被存候。

◎九日香雨、四三子など同伴午前發車、龜山、柘植等にて乘替伊賀の上野驛へ着せしは十一時、夫れより二十町ばかり人力車にて參り、八百新と申すへ休み申候。

◎柘植と申候所は彌平兵衛宗清ゞ屋敷跡ある所芭蕉翁が生れし村に御座候、翁の家系は現存せる由に御座候、此停車場にて翁餅といへるを賣り出し申候、是は兩の手に桃と櫻やの句にちみて草餅仕立候由に御座候。

◎上野町森川乘雲氏は松江氏より手紙送られありし趣にて心配しゝ呉れられ候、同所の翠香と申候人來訪せられ申候、寛永年中渡邊數馬が川合又五郎を打果せしといふ、伊賀越敵討の場所は馬苦勞町鍵屋の辻とて、今も渡邊、荒木などの休みしといふ茶屋有之、翁のさま〳〵の櫻は十數年前に枯れ候由、五庵の内箕虫庵丈は今も猶西日南町に現存致し醫師中村玄瑞氏控家と相成居候、農人町の古郷塚は翁の遺髪塚として名高く、嵐雪の筆に成れる芭蕉桃青法師と刻みたる石碑

現存致し居候。

◎花垣の里打越候へば奈良縣大和國添上郡月の瀬村にして夕方着、吟香館今岡利平方へ一泊仕候、春水子より送られ候アイノ製のアラヽギの旅下駄、惜氣なく踏み鳴らし勞れ果て候に付、今宵は是にて筆を擱き可申、何れ笠置山へ泣々罷越可申候間、月の瀬と笠置の風景は明夕詳細相記し郵送可仕候。

先は矢立の硯に禿筆を呵し、梓弓春の宵寐をしのびて、大略御報申上候匆々頓首。

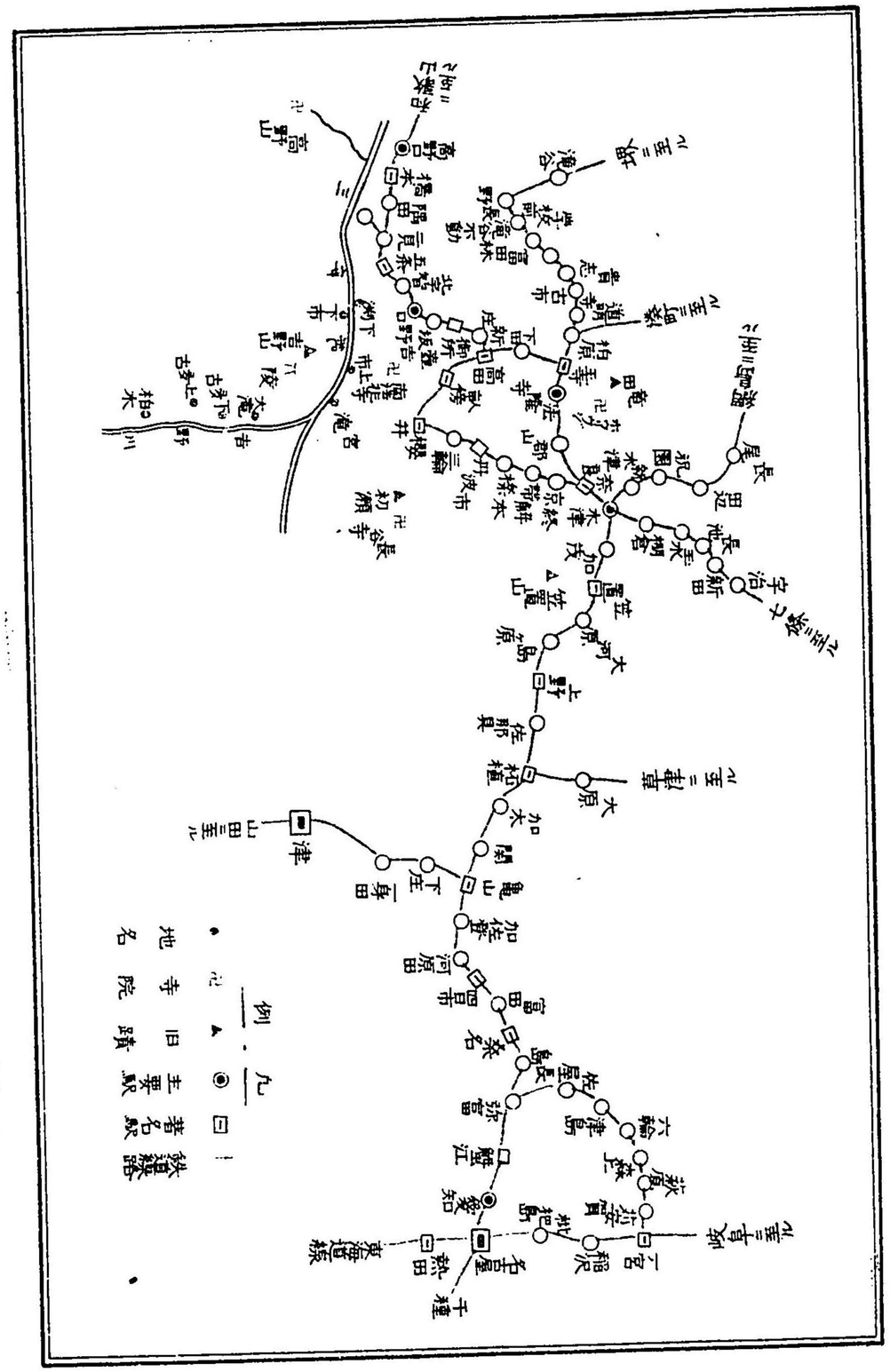
（三月九日夜）

笠置より

肅啓昨夜以蕪書申上候通、先刻此地へ着候間、左に昨夕以來見聞の大略相記し申候。

◎月の瀬の光景に關しては齋藤拙堂が梅谿遊記一より九迄有之、山陽、小竹の評ありて盡さゞるなく、梅谿も此記の爲めに世に知られ、拙堂も又此文の爲めに世に知られたる位に候間、小生がくだ〳〵しく記し候は差控ゆべき筋なるべく、仍て同じ記に見えざる事の心付候儘を書付申候。

◎東京よりする旅人は午後二三時頃迄に月の瀬村へ掛り、北岸たる尾山等ゆる〳〵見盡し頓て南岸の月の瀬へ渡り、茲に一泊して夜景



を賞し、翌朝駕を用意し、暫くは徒歩にて、夫れより駕にて桃香野へ越し、笠置山へ出るをよしとす、此地に來りて笠置山を訪はざるは、南都に入りて春日に詣でざるか如く被存候。

◎目下の處にては上野は三重縣伊賀國、月の瀬は奈良縣大和國、笠置は京都府山城國なれば、九日、十日の二日の旅は、伊勢の津を發足して三縣四ヶ國に御座候。

◎梅谿の絶景奇勝は今更にも云はず、其梅に配置せるもの大なる谿流あり、又細流の石に咽びて碎くるあり、竹林の屏風せるあれば、杉苗の霜に負けて異樣の下草となれる、茶株の笠伏せたらんが如く並べる、落込みたる谷間の此所にも彼所にも、又茅屋の點々散在せる、水車の半ば破れたるまゝ働ける、盡く詩趣ならざるは無之候、然るにも不

拘、御披露すべき程のもの句も得不申、ほんの當坐のものゝみにして汗顔の至りに御座候。

水車側に一二本梅の花　香雨
見下すや梅の木の間を水の行く　三四子
下草の杉苗赤し梅の花　竹冷

◎此邊の梅は一帶に若木にも苔蒸居候間、大に工合よろしく、數里の間參差横斜、龍の如く、鐵の如く、仰ぐあれば、偃すあり、交梢孤梢、柳に似たる枝は少くして、鞭に類するもの多く、瘦せて千歳を經たらんが如きさまは、頗る風致有之候。

◎先年より月瀬保勝會なるもの發企せられ、大に梅樹培養致居候、結構の事に被存候。

◎梅は遠く詠め候よりは近く見候方よろしく、夜は疎影をぱつ〳〵踏みつ潛りつ往來する心地得も云はれ不申候、三月九日は舊二月十七日にして生憎朧夜ながら、又一入にて有之候、北岸三分、鶯谷邊五六分、南岸六七分、桃香野は九分或は十分の盛に御座候。

◎笠置山へは四里弱に候間、月の瀬午前八九時頃出發せば桃香野の絶景は駕にゆられなから之を賞して登過笠置山へ達し得べく候、同所に松本亭と申候茶店ありて、龍背辰次郎と申候若き男、綿密に案内致しくれ候間便利に御座候。

◎人心は妙なものにて、其地に到れば直に太平記を憶ひ起し、涙は既に襟を濕し申候。

◎山中には帝跡は勿論、古雅の梵鐘、藥師石、彌勒石、金剛石等種々なる

名目の巨石有之、多くは佛像を彫刻し、空海の作とし、解脱の經營に成れるを說き候、何れにしても開山の古きことは、梵鐘の建久年中に製作せられしものたるにて明に御座候。

◎山嶺には好き程の平地有之候、木津川を見下し有尾山を見渡し候に就ては、さして行く笠置の山を出しよりの御詠胸を打ち暫しは物云ふ事叶ひ申さゞりし義に御座候、又右手の谷間に相見へ候小村落は目今は笠置村の內には候へ共、大字飛鳥路とて、元弘の兵燹も此村人の案內より賊の間道を涉りて行宮を襲ひし結果とて、今も猶笠置村民は飛鳥路村民と婚嫁を通せずとて輿夫の力めるは難有事に御座候、旅は藥に感じ申候。

◎霞晴れて其曉や彌勒石、とは長英の作にして、木津川や白に棚かく

星祭、とは尙白が布さらす里見付けたる、いづれも眼前にありながら、扨句としては三人共、只斯くあるべきか否然にもあるまじとて、里へ下りたるは足元の明るき內に御座候。

◎小波兄より或る所にて珍書入手せりとて端書を得候間、道の序に立寄らるゝ事もやとて、此終列車にて津迄今晩中に歸らん爲め少しの時間走筆投函仕候。

右の簡單なる始末は歸京の上修飾のなし方にて、或は少しく俳席を賑し候に足り可申歟、是は內々呵々頓首。

（三月十日夕）

俳諧草枕

◎皐月の末より九月のはじめ迄、十里にしても足れるを二十里或は五十里百里と、横に入り縱に走りて夫から夫れと綿抜きし衣のうら取りもあへず「フランネル」といふものを肌に馴染める頃蝸廬に歸れる、愛くもあらぬ獨旅行、草枕位が罪なき名なるべしと何とも心掛けず、思ひ起せし節〳〵書付け侍りぬ。

◎宗祇が名所方角抄、西鶴が一目玉鉾、道春が丙辰紀行、蓋軒が京廻り大和廻り抔、委しからねど古雅にして心地よき旅の友ながら、夫れすら洋傘一本飛乘の腕車には同伴をゆるさず。

◎海濶纔浸半邊影、多少漁舟戴雪行との妙句も、思ひ出で三月七日八

日ならねど、富士に添ふて旅するものゝ快哉を呼ぶは駿河路の晴天なり。

富士の根を山時鳥取て行く　宗因

◎京に入るの前に過ぎれる近江は名勝多くして暫時には物しがたし、古戰場の勢田は壬申の昔しを追懷し、湖上に浸せる叡山の面影は眞に是好風美景非無意吾亦東西南北の人たり。

さゝ波や風の薫りの相拍子　芭蕉

虫干に古き具足や山法師　正秀

小橋へも手分して飛ふ螢かな　優七

◎萬壽二年逢坂關守の僧大堂を營み建てゝ寺中に彌勒の像を安置す、其材木最も巨多なりしに、一牛ありてよく是を運搬して堂址に送

れり云々、結局其牛は迦葉佛の化身なりしよしにて、牛佛として之を祭れる事は榮花物語に見ゆる所なり、牛の歩行は汽車中の夢には移らず、關の清水、關寺、蟬丸社も訪はざりし。

蟬の聲宮も藥屋も雪隱も　不角
關こえてしるもしらぬも袷哉　凉菟

◉生藥の二條通りや雲の峰、といふ京の何狂が句の邊りに住める、舊家に大村彦太郎(呉服商白木屋の本宅)といえる懇意の家あり、之へ厄介になりて夜すがら主人と語れる内、彙々己れか調べし事ども確かめ得たれば、面白き點二三を記さんに、

恩借致金子之事

一金子　十兩

右者要用に付恩借致候所實正也返濟之義は來秋江戸より相達可申候爲念書付如件

寛政三年亥七月十七日

白木屋　孫兵衛殿

上州新田　高山彦九郎 正之

◉此書は固より高山正之の自筆にして文字頗る雅致あり、黒肉の實印三ヶ所へ捺せり、孫兵衛は其當時の番頭の名也、正之よりは其後度々詫譯の手紙參れるも疾くに失せてあらざるよし。

汐干もがな波こゝもとに堺町　可全

◉是は元祿十二年五十七歳にて死去せられし其當時の大村彦太郎

氏が自書短冊の句なり、可全は「ヨシタケ」と讀みて、今の主人彦太郎氏も義全と云へり、全文字は世々の名乘に用ゆと、堺町の句は堺町通二條上るに住居せるに由れり。

時雨にもぬれにぞぬれし青松葉　可全

狸ふすふる冬の山かげ　同

汁鍋のつる〳〵出る月寒て　同

（以下略す）

◉是は貞德老人追善獨吟集として出板せしものにて、正章、湖春、元隣、可全杯各百韻せるものなり、又萬治三年季吟の新續犬筑波集中其名數ヶ所に散見す。

春はけふ立たり居たり弓初　可全

◉是は滑稽太平記中に見ゆ、又土芳の生れ、林道春の死せし、明暦三年中季吟、元隣、可全、の三つものを出したり、季吟は拾穗の名を以てす、此前後中〳〵に三つ物流行せり。

御歌學所北村拾穗軒再昌院法印

◉季吟

京 元隣山岡
同 同 可全大村
同 則常伊豆

是は綾錦にある所なり。

◉北村季吟——可全大村氏通稱彦太郎家名を白木屋と云ふ、京師室町に住す、和歌連歌に達す、元隣、可全は吟叟羽翼の門人たり、是は俳家大系圖にある所也、芭蕉と同門にして翁に一歳の兄たり、

翁は元祿七年に沒し可全は其十二年に死せり。

◉五條わたり夕顔の宿近きとは、元祿五年似船が物せし堀河の水の序に見ゆる所なれば、何となくゆかしく、其間屋町通の入魂なる蓋家柏原家へ暫く足をとゞむ。

夕顔の五條にかへる糊屋哉　蘆元

◉耳塚に物云ひ大佛に眼を覺まし、妙法院門跡方廣寺阿彌陀峰に豐國祭の名殘を拜み、小松元御坊、西大谷、建仁寺等を過れり。

耳塚に蚊の鳴く聲も哀なり　兎士

わんと云ふ大佛殿や杜宇　汝村

竹の子の力を誰れにたとふべき　凡兆

◉今は立派な町つゞき、眞葛原より安井神社、高臺寺を經て双林寺に

至れば、寶永五年涼菟、支考、吾仲等が月を翫ひし連句を思ひ出し圓位、頓阿、康賴の塔、芭蕉堂、大雅堂を訪ひ、西行庵に葉櫻を賞しては、却て此所に素堂が「又是より若葉一見となりにけり」の俳句うかみ出るもおかし、同庵中蘆元法師の碑は五竹坊が建つる所たり、東大谷より長樂寺へ參れば、奥深く寂たるぞうれしく、寛保元年丈石が一日千句せしは此寺なり、智恩院の鐘を撫て、吉水法然上人螢の窟、粟田青蓮院、植髮御影堂、疏水運河、平安神宮、紀念堂、彼れに古代をなつかしみ、是に今代の太平を謠ふ。

我戀そ慈鎭の殘す子規　言水

吉水や鉢にたゝへし冷し物　介我

杜宇安井の藤も散にけり　汝村

◉山門とは叡山を云へるにて、常の寺院は三門なりとぞ、其意は空門、無相門、無作門の三つに取れりと、今は京の寺多くは三門の札を掲げあり、

◉季吟が祇園にて「月は洩り花の蔭けり二軒茶屋」の句あり、沾凉は寛保三年の藻鹽袋に、元祿の頃京祇園林の小菊屋に、梶といふ女和歌を善す、常に茶棚に源氏さころも等を置て賤の女の業にあらず、かれか詠む所の和歌を集めて梶の葉といふ書あり、其後百合といふ女かぢ女に亞げり、これが詠する歌は早百合葉と號く、今又小百合といふ女その跡を追ふと記せり、又勤隨筆には、

梶が茶も薪に花の時分かな、と雪中かいひしにと

なりて、

今も名を鳥居のお百合杜宇　天盌

◉先年予は「さん候僧正が谷の杜宇」といへる句吐きし事ありて、一度は鞍馬へ登らばやと志せしに折よく案内する者ありて、古蹟ふみ分け貴布禰へぬけ思ふがまゝに勞れたり。

わひしらに貝吹く僧よ閑古鳥　其角

男さへ凄き宮居や木下闇　蝶夢

◉僧正が谷にて時鳥頻りに聞けるより、三千風の旅情を追懷し少し計三千風を記述して讀賣新聞へ寄せし事あり、猶筆の序に時鳥の古句ものすべし、

清十郎きけ夏か來てなく時鳥

◉是は人皇百九代後水尾院即元和帝の俳句にして、恐れ入たるもの

なり。

扨はあの月か鳴たか杜宇　一三子

◎此句多くの人、一聲は月が鳴たか杜宇、と覺へて芭蕉の作とし其角の句と爲すものあり、されど寛文十一年亥年春(芭蕉以前の時代)出版の繪入百人一句廿一枚目に、一三子の自書を刻み出せり、重以の編せしものにて元隣の跋ある書物なり、又元祿十丑年春學堂の著せし俳諧眞木柱六十五枚目にも、文化五年白露か著せし俳論にも、一三とあり、然るに往々藻風と云ふ名を付せし書物見ゆれど、是は眞木柱の百二十一枚目に

舟のつく迄跡を見かへる

扨はあの月が鳴たか杜宇　藻風

とあるより間遊へ來れるものなり、固より藻風と一三とは別人にして、連句の前句に「舟のつく迄跡を見かへる」といへるが出し時、曾て一三がものせし扨はあの丶句を藻風が試みに取合せたるものなる事は、同書の次の行に「中興の發句を取合せたる可謂奇妙」とあるにて分明なり。

◎時鳥の句の緣より扨といふ文字の事いはゞ榊は神樹にかたどり、鱈は雪國に習ひ、鰯はよはしの訓に基く、ともに和製の文字か、扨といふ字もはしめは眞名書にて叉手と書たるを、五山の酒落などにて一字につゝめて扨なるべしと、あるかた仰られしさもこそ、と米仲は記せり。

◎白炭の忠知とはひと年

白炭や燒かぬ昔の雪の枝

と吟せしより擧世賞美し此名を得たるものなれ共、予か見當てし數書を引て疑ひを記せば、其角の雜談集にはされば白炭ときこえし忠知か云爲とあり、大系圖には秀吟を吐てより人稱して白炭の忠知といふ、白炭の句は寛文四年松江重頼が撰める中山集只の部五十六丁に出たり云々、尙白炭の句には先哲の異論もあれど茲には云はずとあり、靭隨筆には白炭の忠知にも「白炭やふたゝび積る雪の枝」といへる作例はある也と見へて、年代人名を詳かにせず、隨齋諧話には白炭の忠知とよびしよし云々、おもふに良保か破枕集に、白炭はやかぬ昔が雪の枝種友、とあり、此集は寛文癸卯夏刊行なりとあり、卯年は三年なれば重頼の中山集よりは一ヶ年前の刊行物に既に見ゆるもの

とす、俳論の一卷には清十郎さけの句と並べて後水尾院の作句となす、且其二卷には特に白炭やの句は元和帝の御句にして、忠知にあらずとし、晋子が雜談集に誤りなる事つよく記せり。

◎鷄冠井令德は貞門七俳仙にして綾錦には又良德と云ふとあり、大系圖には初良德後令に改むとあり、滑稽太平記には承應四年改元有て明暦元年となる、當今は人皇百十二代御諱は良仁と申奉る、仍て良德を令德と改む延寶七年九十一歳にて死すとあり、此令德の句として

馬合羽雪打はらふ袖もなし

といふ吟は名高きものなり、然るに俳論の第一卷には、清十郎、白炭、抔の句と並べて後水尾院の俳句となし、且其第二卷には、西鳧が撰集

したる反古さらへといへる書の内、俳人三十六人宛左右を撰たる中に、馬合羽雪打はらふ袖もなし令德とあり、此發句は元和帝の御發句にて御集に見えたり、鷄冠井令德は慶長十八年の生れにて、延寶二年(太平記とは五歳相違)に亡す、さすれば俳諧成就は慶安承應の頃と察せらる、元和帝は慶長元年の御降誕にて、此發句は寛永年中なり、令德より元和帝御前作なるべしと見ゆ、此年代の一事よりせば、白炭やの句寛文年中云々は元和帝に對しては殆と論なかるべし。

◉翁の句解如山にして煩に堪へず、

何の木の花ともしらず匂ひ哉　芭蕉

との句短冊の肩書に伊勢に詣でゝとありて、其短冊に沾凉より文露へ贈り文露より露牛の手に入れりとはあや錦に見ゆ、又藻鹽袋には詳細註して、西行が「何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」の和歌を引けるも、古き連歌師昌琢の句に「何の花と疑はで知る匂ひ哉」の吟あり、此句は梅ならん、翁の句は和歌より來れるものにして、玄妙なるべきも、作柄は連歌の發句より得たるにはあらざるか。

◉大江丸の俳懺悔に

牡丹餅や赤小角豆のかたに秋の風

是野作なれば殊によしとにはあらねど、此句に於ては等類はなかるべし、聊か新らしみをば得たるになりと、自負して過せしが、或日江戸の春來か東風流といふ集中の附句に、牡丹餅のとして、其外一字を違へずあり、されば後の人句を作る毎に等類の難なきやうに思惟す

べしとあれば、予が前に掲げし諸氏の俳句の附記に代へて抜書す。

◉五條の寓居より日の傾けるを見て、四條を過ぎ三條寺町通西入細川清助方へは時々俳書漁りに出かけ、其歸るさは足の向き加減にて或るは千本、又は山清、さては美濃吉、と所選まず涼を追ひ、夕餉したゝめて、鴨川に耳をすまし、燈下に膝を崩して明易き夜とは心付かず。

更衣見ん三條の人通り　只丸

川狩や樓上の人見知り顔　蕪村

杜宇寺も榎もすぐ通り　涼苑

◉大村義全子と峯に雲置く頃嵐山に遊び、清瀧の落口を過ぎ保津川の邊迄舟を引上げしめし事ありて、其下れるさまは說明し難き爽快を覺へし、老鶯に岩つゝじ螢ぱつ〳〵。

若鮎や雪のあまみの大堰夜　朴人

◉この山二町のぼれば大慈閣、先彼の邊へ暑を避けばやと、柏原家の連中と早天より此所へ登り、山僧の設けくれたる、松尾の瀧の下なる納涼臺にて、日暮し雜談を擅まゝにしたり、千光寺は慶長十九年の創立、彼の治水に有名なる吉田了意翁の開基たり、林道春の碑文、西行の木像、隱元獨立、木庵、即非等の書あり、就中小なりと雖、石川丈山の古雅の額面極めて愛すべし。

丈山の口が過たり夕すゝみ　蕪村

◉野の宮の黑木の鳥居に小柴垣は昔なつかしく、小督局の家敷跡、仲國の琴聞橋、渡月橋、三軒家、天龍寺、清涼寺、戸無瀨瀧、を踏まへて溫泉に浴するも妙なり。

夏草に痩せて黒木の鳥居哉　希因

三日月に車の音や麥の中　風國

うきふしや竹の子となる人の果　芭蕉

◎雨の宇治雨の銀閣寺は殊によしとの事聞及べるまゝ、待搖へ居りしに、ひと日小雨はら〳〵と來しに、重道か扇折る礎やさしや御影堂、といへる其邊りに住める好事家の扇商林阿彌、かけ付け參られ、先生けふどす〳〵是から直に奈良鐵道にて罷らんとてせき立ければ、夫れよかるべしと外に丹江といへる者を伴ひ、宇治の萬碧樓へ着せし頃は細雨糸の如くありし、平等院、釣殿、扇芳、賴政墳墓、鳳凰堂、縣神社、橋姫社、宇治橋、三の間、通圓の茶屋、橋寺、斷碑、宇治神社、興聖寺、琴阪、浮舟の卷に見ゆる橋の小島崎は形ばかり、浮島は浮けるが如くなるも、山吹

の瀬は曾て洪水に押流されしと、喜撰ヶ岳、朝日山、醍醐等雨中に見渡し、其雲烟の模樣云はんかたなし、乘ねては柴舟一見せばやと樂しみしに、朝ならでは下らずとの事にて一泊せしも、翌日は午前八時頃迄小雨降れる爲めけふも覺束なしとなり、されば其内雨も晴れたれば、小舟を借受け新濱といへる柴舟下すべき村の近間へ掉し、此舟へ此柴を斯く横たへ朝の内宇治迄下すものなりとの説明を聞き、同じ舟にて宿へ戻りぬれば十二時頃なれば、壺のものしたゝめ、瀧車に飛び込み木幡へ飛び下り、黄檗山萬福寺へ參詣し、三時頃京へ戻る。

かしこさよ合戰なしに飛螢　許六

草臥れて尻に敷たる扇哉　萬中

新茶古茶宇治はいそかし杜宇　諷升

山吹の瀬や淵となる五月雨　雨銘

橘の小島が崎も青田かな　知足

喜撰法師螢の歌も詠れしか　素堂

翌はとく蟬鳴せよや朝日山　立志

木履ではおそし木幡の時鳥　原松

黄檗や通辭入らずの杜宇　蠅虎

◉通圓茶屋は東の橋詰にありて、通圓法師が此所に茶店を搆へ、諸人へ茶を施して結縁せし所なり。

鮎汲むも通圓風か宇治の川　凉之

◉嵐雪とふとんは引合はずとも、蚊屋抔ひとつにすべき、清水の下八阪の塔の最寄に某の別邸あり、庭廣く樹木茂り、家高く間數多ければ、

暑を凌くには屈强なり、壹猶暗うして稀に音づるゝは、蟬の梢に唄ふあるのみ、居を此所に移して壁を踏まへ、古書を枕とするの自由を得、蚊の聲程も浮世をしらす。

明易き夜をかくしてや東山　燕村

◉東本願寺の噴水は遙かに望むべく、西本願寺の銀杏は謂れを聞ば有難くもあるべし、東寺にさま〳〵の思ひを起し、六孫神社に華族の系統を研究すべく、島原に遊女の別當ありし昔時を追想し、壬生は踊の名に偲ばれ、空也堂に鉢叩の甚之烝も訪まく、六角堂の池の坊、何れ俳味の存せぬはあらじ。

西東六條どの〳〵牡丹哉　許六

夕貌やあるじをとへば鉢叩　可風

六角は京の最中や杜宇　盈斧

◎島原の事に縁あれは記さんに、建久四年里見冠者義成を遊女の別當となすべしとは、東鑑に見ゆ。

◎遊女から思ひ出せし句は

京女郎田舎女郎や雪の峰　紀之

是は備前の冲に京女郎、田舎女郎といふ二ッの島ありしより作せるものなり。

梅さくやしらゝおちくぼ京太郎　芭蕉

此句を此所へ出せしは女子の事より聯想して筆の序にものせるのみ、しらゝおちくぼ京太郎の解釋は、淨瑠理物語十二段の姿見の段といへるに、まなの上手にかなの一、よみけるさうしはどれ〳〵ぞ、源

氏さごろも、古今萬葉いせもの語、しらゝおちくぼ京太郎、百餘帖のむしつくし、八十餘帖の草つくし、扇流しに硯わり云々と見ゆ、此書には節付けせしものと只のよみ本とありて古雅のものなり、芭蕉が之を配合せしめしは、衆を拔出たる腕前なる事を知るべし、淨瑠理物語の考證は予別に說あり。

◎東山の燒物西陣の織物是京の二名物なり、先年予は京の宿金魚水盤に放ちたり、と作り秋聲會にて夏の季と定めしに、今東山にあれば軒毎に陶器商、燒物の金魚水盤に放ちあるもおかし。

踊れるや狂言金魚秋の水　松滴

の句は萬延年中の作にして、新續犬筑波集に見ゆる所なれ共、秋の季を入れありて其踊れるとは、中昔は金魚に狂言させぬる事諸書に

見ゆ、又

影涼し金魚の光り鎭鍮や　調梔

とは延寶年中の吟にして、下谷池の端の名高き金魚屋をよみし句なるべし、是も涼しと入れて夏とせるのみ、狂言の事鎭鍮やの事は種彦が用捨箱に委しくものせり。

◉芭蕉にも皐月富士ありと米仲が異な事の樣に思ひしも理あり、中頃迄は大根引も竹植る事も俳句の題にてはあらざりしを、今は人の其事すら知るもの稀になりけり、予が今度選みて春陽堂より出せし俳諧木太刀には、夏休、潮浴、金魚、ラムネ、蕉實、袗卷、等を題として入れぬ、追々研究せば此類のもの猶あるべし。

◉東國寺の邊の景物としては「嗟此地の蒸くる暑さ矮き屋にはいかでか堪む、蚊に喰るゝも腹のたつぞや、いざ給へ近き野邊に出て、蟬の喰殘して落たる風もあらば拾はんとて、月見の橋のこのもかのも、芹の清水佐藤忠信が舊跡などたづねて、東寺九條にあゆむ程そこらの艶色、三ッ四ッ五ッと數へもて行程に十景みちたり」と似船が自序せし堀河の水三冊は、元錄五年の稿にして七年の二月に刊行せるもの、昔が見へてゆかしき書なり。

（一）稻荷旅社

◉稻荷大明神は延喜式神名帳に山城國紀伊郡稻荷神社三座、上社は太田命、中社は倉稻魂（うかのみたま）、下社は大宮姫なり、元明天皇和銅四年はじめて、伊奈利山に現し給ふとあり、稻荷の文字は飯成（いなり）とも書侍る、弘法大師飯成山と筆を染め其額今に社頭に侍るとぞ、御旅所は油小路七條の

南にあり、其邊葭簀かけわたせし茶店を排ふ。

茶屋いかに初時鳥旅社　一社

（二）田中時鳥

◎田中の社の跡は古へ猪熊通九條にありしを度々洪水此地を浸す故に改めて本宮にうつし侍るとぞ此邊地主の神なり、著聞集の和泉式部稲荷詣の古事もあれば、狐の化て舞妓となれる咄しもあり。

伽羅の香を田中に殘す時雨哉　柳端

（三）瓜田夕照

◎瓜の名を得たる所〳〵は、山城の狗の里、川勝寺村、谷川瓜、大和の梵天、和泉の艫の松、武藏の葵瓜抔あまねく人のもてはやし侍る名瓜なり、今こゝに云ふ瓜田は、美濃甜瓜の種をうゑて生じたる、風味他に異

なれる東寺九條の瓜田なり、此所の瓜の中にも勝れたるを、其地の人選みて瓜面に黒印を點す、之を判の瓜とて世に名高き名物也、此瓜畠の夕陽の姿心あらん人に見せまほし。

瓜抱て夕日に踊る狐かな　一吟

（四）南里刈藍

◎東寺九條にもはら作り侍る、其かり藍を七條鹽小路の民家の家の門〳〵にほし並べて、女は庭に慶び男は市に歌うたふ。

刈藍に花忍冬のなさけ哉　平井氏女

（五）

◎茅屋に板葺ところ〳〵立まじりたる、九條村東寺八條のそこ〳〵へ通ひ侍る、野徑の春色なるべし。

若草よ誰かあとつけし島原の文　　萩夕

（六）七條商客

◉萬葉にも西の市東の市の歌あり、油小路七條の南に青物の市店夏秋殊に賑はし。

市人や初音邪魔する杜宇　　時樂

（七）堀河蛙聲

◉此河はみなもと鷹か峯より出で、二股河を過ぎ本法寺の前を流れて、戻橋を過て二條の城の前より本國寺、本願寺をこえて、月見の橋を過ぎ烏羽川に出るなり、猶東西堀河の説諸書に見ゆ。

堀河の歌の蛙や太郎次郎　　蟹蟬

此句堀河院御百首はしめを太郎百首と云ひ、後のを次郎百首と申

侍るに由るか。

（八）橋上秋月

◉此橋は鹽小路堀河に渡せり、所の人は生酢屋橋と申侍る、東山清閑と阿彌陀が峯の間より出る所の月、信濃國姨捨山より出る影に似たるとて、古へより賞翫する地なり、故に月見の橋の名あり、平重盛、源融が月に歩せし所なり。

橋板の釘數へなん秋の月　　勝信

（九）東寺昏鐘

◉東寺の事つぶさには、金光四天王敎王護國寺と申侍る、山號を、秘密傳法彌勒山といひ、院號を、普賢總持院、と稱す古昔は此所に東西精舍あり、西を西寺といひ、東を東寺と稱したり、一生は是風の前の燈、萬事

は皆春の夜の夢なりとは、永觀律師往生講式の一ふしにして、東寺の緣記は此觀念にとゞめて他の煩を避く。

鐘霞み松昏やすき東寺哉　似船

（十）祇陀林藤

◎此寺は七條の南朱雀にあり、古へは觀喜寺と號し、或は廣幡院といふ、釋迦佛を本尊とす、後祇陀林寺と號す。

祇陀林は藤を地に敷く嵐哉　似船

◎狐の句よりうかみしは、和名抄に其花穗を作して翻々として物の尾に似たり、よつて尾花と名くと見ゆ、發句にも附句にも、或る場合に芒と云はで尾花とせば仕立かたにて引立べし。

◎稻荷山、東福寺、通天橋、三の橋は或る夕暮に之を訪ひ、道を變へて山

崎へと考へしに、空模樣あしく引返して宗鑑をおもふ。

宗鑑が姿を見れば餓鬼つばた　龍山公

呑んとすれど夏の澤水　宗鑑

是は享保五年綾錦に「山崎の宗鑑かきつばたを折とて池にのぞむを御らんじて」とはし書あり、龍山公は近衛前久公なり。

宗鑑か姿を見れはかきつはた　逍遙院殿

のまんとすれと夏の澤水　宗長

蛇におはれていづちかいるらん　宗鑑

是は寛永十年の犬子集に記する所にして、發句は逍遙院殿、脇は宗長、第三は宗鑑云々とあり、逍遙院殿は三條西內大臣實隆公なり。

手にもてる姿を見れば杜若　逍遙院殿

滑稽太平記の人名は、三人とも犬子集と同じけれ共手にもてるとあり。

宗鑑の姿を見よやがきつばた

其角は雜談集に右の如くして近衛公とせり。

宗鑑か姿を見はやかきつはた

白露は俳論に右の如くして内大臣宗隆公として痛く其角を誤れりといひ、成美も諧話に論ずる所あり、愚按は今茲に云はず。

◎貞徳門七俳仙中山本西武は人多く「ニシタケ」と讀來れるも、滑稽太平記には「サイム」とせり、又蕉門の惟然は人多く「イヂン」と呼べども、成美は是は「イゼン」と云ひしなるべしとして、其據ろは七車に、

秋晴れたあら鬼つらの夕や那　惟然

いぜんおじやつた時はまだ夏　鬼貫

とありて、一方は即時に名を入れて戯ぶれしにより、他方が先きの名を入れて挨拶せしなれば之を知るべしとなり。

◎俳家の宗匠中々喧嘩沙汰も澤山聞ゆれども、重頼位相手多きはまれなり、重頼が犬子集を編するに當り立甫は、

螢火は川瀬の中の炎かな　立甫

といふ句入集ありたしとありしに貞徳の

螢火は野中の虫の炎かな　貞徳

と等類にして、且翁に遠慮すべしと返答し、貞徳は中に入り是非立甫の句を入集せよとすゝめしも重頼承引せず、以來立甫とは不和になるべしと斷言し、遂に貞徳とも立甫とも絶交するに至れり、立甫が

發句帳を編みしは之が爲めなり、貞室は母の追善に、

葉は花の臺にのほれ佛の坐　貞室

といふを作し重頼に相談せしに、此句不宜所あり流布は無用にし給へと云ひしを、貞室は之を發句に百韻を綴り世に披露せしより、重頼は、

朝貌は日まけをしてや鼻ひしげ

と吟じ(一說未得が句を斯云なせしと)貞室の鼻ひしげを嘲りたるより大喧嘩となり、貞室は毛吹草の難書として氷室守を出し、又は、

送火は御身か爲めか大文字　貞室

と作し重頼を墨靈に見立送句したる杯中〳〵やかましかりしのみならず、池田正式は重頼が毛吹草を編むに當り、

庭訓は春のはしめの試筆哉　正式

といふ句を卷頭にすべしと約せしに、急に變心して、

鶯も歌機嫌なり今日の春　春可

といふ句を卷頭に置たるより、正式怒て毛吹草の難書を出せし所、重頼は討果すべき旨の決鬪狀を付けたり、如此相手變れど主替らざる喧嘩屋も少なし。

◉翁の奥の細道に「ことし元錄二年にや奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ちて吳天に白髮の恨みを重ぬるといへども」とありて、或る書には白樂天の去年九月到東洛今年九月來吳鄉兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黃、の中の語を取れるにやとあり、梨一は安氷七年菅菰抄を出して、禪則にとして笠重吳天履雪芳楚地花、といへる句を引き、

吳は五の字かといぶかしき說あり、信ぜさりしが、此程久しぶりにて中根香亭翁に不計落合うて談此事に及びしに、自身も兼〳〵心掛けしに、此兩三日前見當りたればとて、其翌朝直に原詩を寫し送られたり。

天聖間、閩僧可士有送僧詩云

一鉢即生涯、隨緣度歲華、是山皆有寺、何處不爲家、笠重吳天雪、鞋香楚地花、他年訪禪室、寧憚路岐賒、

とありて出所を知るを得たり、されど名作とも感じがたし、尤中に趣ある句も見ゆ、天聖は宋の仁宗の時の年號なれば古きものには相違あるまじ。

◎雨の銀閣寺へは日を得て參りたり、流石に義政閑居の面影追懷せ

られ、四面の綠樹翠堆くして云はん方なし、元信、應擧、蕪村、大雅等の、古器物古書畫は一々記しがたし、南禪寺は又格別、鹿か谷には法然上人の舊跡も、安樂寺の鈴虫松虫も、或は上下加茂の社へ參詣し、紫野の大德寺、今宮神社に建勳社、船岡山に腰かけし夕もあり。

池水に箔もちりけり蓮の花　蝶夢

外の花や何れの御所の加茂詣　其角

◎京の祭りは祇園會、稻荷祭、御靈社、今宮、加茂の葵祭、北野祭、及近年の平安宮時代祭杯名高きものなれども、寬氷年中立甫は祇園會兩度の山鉾鍊もの迄、雛人形に作りたる俳家の因みも深ければ、一見せばやと思ひ居りしに、折よく七月十六七日も又廿三四日も居合せたれば、望むがまゝに見物せり、古事來歷は如山、限りある筆紙のよく盡す所

にあらず、町の飾付氣高くしてゆかし、屏風品々或は仁齋、丈山、大雅、蕪村、又は光琳、光悅、應擧、月仙、吳春、及訥言もあれば、始興もあり、金銀の無地もあれば、蜀山、と季應の武者繪、浮世繪、入り亂れ眼覺しき事限なし、されど雜沓には閉口。

祇園會や眞葛か原の風薰る　蕪村

◉蜀山の事記せしより狂歌の一ふし記さんか、蜀山百首に、

萬年と限れる龜も尾の長き
友にひかれて億兆やへん

此狂歌は得意のものと見へて澤山見かく、現に此度四條通の四角の家の屏風にもありたり、然るに此原歌と云ふべきは

千歳までかきれる松もけふよりは

君にひかれて萬代やへん　大中臣能宜

といふなるべし、此歌主は式部卿の宮の御子の日に詠ぜしよしにて、能宜は父頼基へ語りしに父は暫く吟詠して、帝王の御子の日にはいかなる歌を詠ずべきとかたはらなる枕をとりて打ければ、能宜は赤面のあまり逐電すと聞へたり、如此なれば原歌は先以取消したるものなるに、狂歌のかたは却て繁昌なるもおかし。

◉清水に智積院、卅三間堂に血の天井、朝夕の遊歩道、能く知る爲めに珍らしからず、扨草枕の露けさも俳蘐の故紙底を叩て、大概は拂ひ畢ぬ、一笑々々。

（三十一年九月三日稿）

臺灣と南清

◎明治三十二年五月一日夕六時新橋發汽車にて一寸臺灣南清方面、遊びに出かけたり、いつの間に歟田口卯吉、矢野二郎、松田秀雄、加藤政之助、鈴木萬次郎、淺香克孝、星松三郎、石川安次郎、桑田房吉、齋藤峰三郎、黒須龍太郎外數多の諸氏と川村雨谷、森無黄、伊藤松宇、森猿男、谷活東、佐藤小草、星野麥人、安藤紫風の諸俳士停車場へ見へられ何やかやと送別の辭と留別の辭と交換しつゝお別れ申たり。

かけて來て四百餘州を杜宇　烏墨
月華をいざひろめませ四百州　松宇
折々は不二見返れよ日本海　猿男

別れ路を見てや鳴くらんぬり雲雀　活京
お返りの程は牡丹が咲ぬべし　麥人
一・聲は天笠迄も杜宇　小草
お土産は天津橋上杜鵑の句　紫風

◎浦夫婦及家族などの世話島田氏等より贈られたるもの車中に入れ、二日には大阪の柿崎氏方へ一泊、沼津にて俳友と語り、西京よりは大森氏等柏原家の手代とともに見送らる、昨日は晴天、今日は夜に入り雨ぱつ〳〵。

◎三日午前十一時頃神戸より横濱丸へ乘込む、小倉勝三郎氏諸事世話し呉れらる、正午出發朝の内小雨後晴天、明石海峽、淡路島、須磨、舞子、行通ふ人の數迄指折り得べし。

◉横濱丸は二千三百十四噸、十二ノットの由。

◉四日晴天、午前八時半門司着、船中貝島太助氏あり大吉樣へ案内せられしも辭す、同氏へ一書を托し東京へ發送し貰ふ、船は午後三時迄滯港との事なればやがて上陸門司や馬關を見物す、三時發船。

●五日晴天、盡夜靜穩、不斗脚部に腫物を生じ醫員芝賢吉氏に診察を受く。

◉六日晴天、琉球沖通過燕の返るに逢ふ驚を見しは珍らし。

鳥に聲かくる他郷の卯波哉

午後三時腫物三ヶ所切開す、是南京虫が原因せし歟。

◉七日午前八時基隆着、伊藤郵便電信局長より來電ありとて、向井田氏小汽船にて迎へらる、十時發車臺北へ向ふ、此汽車中〳〵におかしく、貨物と人數の多き時は、途中にて下車して數町の間はぼつ〳〵歩行せば、汽車はゆる〳〵やつて來る、其日の永き土地のさまぞ眼に見ゆれ。

◉牧畜、水牛、農家、田夫、支那的景物うれしなんど云ふばかりなし。

朝貌や水牛の角に這ひかゝる

間もなく臺北のとらやといへるへ投ず、柵瀨軍之佐、後藤長官等來訪、船中にて逢ひたる東京府より此地へ轉勤せし加賀來氏よく世話し呉る。

◉後藤長官は臺灣はペストの流行する所なれば腫物を切開せし上は一時も早く入院するの必用ありとて此日休日にも拘らず、臺北病院の和辻氏を呼び寄せ、診斷の上其夜入院する事となりたり、看護長

田村氏外に服部氏世話役となる。

◎八日午前四時半繃帶整理其他、時々雨來り午後よりずつと雨、柵瀬氏、三瓶氏、橋本忠次郎氏、横澤次郎氏等來訪、院長山口秀高氏、醫長和辻氏廻診、

◎九日晴天、去りながら雨折々來る。井出道次郎、加藤景信、信太歌之助、河野仙之助、有泉朝次郎、佐藤清潤の諸氏來訪、後藤長官は毎日退廳比より來訪、高談放議の爲め四隣の病客其賑やかさに驚く。

蚊を燒て蠟燭臭き夜明かな

◎十日曇、足利天夜氏は目下芝蘭北投虞兆庵に在り、細野南岳氏は丸山公園側劍潭にありとて來訪、其他如例人々食物、飲物等日々贈り來らる。

◎此比より廿二日迄は毎日轎に乘りて市衙學校、物品陳列所、製茶所、裁判所、警察署、度量衡調査所、商業組合等巡覽、時々講演に臨む、虞兆庵に到り、劍潭に行く。

相思樹や小池の中に川狩す

軒先を飴賣る鉦の炎暑哉

虞兆庵にて

禪寺や鳳梨畑を過くる百歩

◎此間來訪せるもの、賀田金三郎、山田伸吾、田村實、原芳太郎、永田二郎、高橋甚藏、仇聯青、高原繁藏、中川又三郎、大庭永成、横山孫十郎、高橋忠義、松井四郎諸氏の外土匪に關して臺灣人、通譯と政府との關係に付此人々、日々來訪いつもの連中は如例。

◎或る夜大稻埕の義和洋行ジアーデンマデソンのベスト氏宴會に招かる、後藤長官、大島秘書官、村上知事、黑岡海軍少將、木越陸軍少將、中村稅關長、淡水の英國領事、獨國領事、米國領事、佛國領事、蘭國領事と共に歡談し十一時過歸寓。

◎或る時は河野仙之助、渡邊信夫兩氏の案內にて芝蘭に到り校主本田茂吉、敎諭木原豪、同すま子等諸氏の女學校に臨み講演の後生徒の成蹟を熟覽し、又或る時は枋橋の林本源氏方へ到り晝餐の饗を受けたり、林本源氏の庭園に臨みて如何にも支那畫を見るの心地せり、珍らしく感せしは木に於て玉蘭、竹に於て觀音竹、池魚の大なるものに鯉魚といふなりし。

◎兒玉總督及び後藤長官の招待に赴き、土地調査局に中村氏の說明

を聞き、法衙に實地の取調を見たり。

◎官民懇親會を開き招待を受けたり、後藤長官、水尾覆審院長、川淵檢察官長をはじめ民間有力者も多數會合せり、予は之に臨みあらゆる臺灣問題に關し一時間半の意見を述べたり、而して結局斯くせば、五年の後に於て大に整理し得べく、此時より優に歲出入相償ふべく、十年後に於て自活の順序を立て、干涉を避けたる政治期に入るべしと論了せる、多少の參考と爲し得べかりしや知らず。

◎はからざる事の出來にけり、そは他にあらず、浦太郎氏の來任是なり、後藤長官も予と浦との關係は知らずありしなり、浦は予が長女四三子の夫たり、夫れが此一兩日前此地へ赴任し夫婦來着せる比は予が南清へ出發せんとせし日取なり、早速浦の住宅へ行移り諸所巡覽

廿七日淡水へ一泊、廿八日厦門へ渡るべく乘船す、大風怒濤警報上る、去りながら午前十一時出發、浦兩人、有泉氏等見送る。

警報と相對す富士の綠なる

是は臺灣富士と警報との實景なり。

◉臺灣は南北に長く東西に狹し、北基隆に入りて南恒春に終るべし、年中平均溫度は華氏の七十度乃至七十五度の間なり、五月より十月迄暑氣甚だしく、十一月より四月迄氣候溫和、十二月より二月迄寒冷の節ともいふべきかとの事なり、又三十一年の最高度は臺北五月九十七度七、臺中の五月九十三度一、臺南の七月九十八度四、恒春の七月九十三度一、澎湖島の九月九十二度三なりし由なり。

◉臺灣の向ふ三軒兩隣ともいふべきは、淡水を距る八十餘哩に福建

の海壇島あり、他は福州、厦門、汕頭、呂宋、爪哇、安南、香港、又葡領の澳門及夫れと相並んで兎角問題に上る所の廣東あり。

◉廿九日午前十一時厦門着、昨午後は黑潮を横切る爲め波浪甲板を越へたり、實はドグラスの汽船と我國商船會社と競爭の由にて、此小なる隅田川丸へ乘込み波を被りたるは、是なん愛國心ともいふべきか歟呵々。

◉厦門の上野領事は小汽船にて迎へられ皷浪嶼へ上陸不取敢山崎屋方へ投ず、總督府技師福田東吾、同十川嘉太郎、土地調査局の村田小十郎諸氏と、落合氏諸所見物の上撮影す。

◉支那街は例に依て不潔、皷浪嶼は清潔にして絶景なり、此邊海中に日本人の三百年前侵入せし跡の見るべきものあり、予は獨轎を雇ひ

山奥に入り、虎溪の三笑を以て名を知られたる、虎溪岩朱文公の故跡たる、白鹿洞、及其附近の舊蹟名勝を探り黙燈比歸寓す、虎溪岩は實に笠置の展開せしものたり。

汗や如何に樹下石上の佛達

◎三十日晴天、午前出帆、海上靜穩。

◎三十一日午前八時汕頭着、曇天ながら中〳〵に暑し、市中巡覽午後三時出帆、厦門及此地は菓物の名所、予に於て滿足此上なし、山もゝの實の大なるもの梅實にまさる、バナヽ、桃、甚だよし。

◎六月一日午後一時半香港着、三井物産會社の人々出迎らる、物産の本店はアイスハウスストリートに、往家は山腹にあり之に投ず、長谷川鉦五郎氏周旋し呉られ、窪田、住井兩氏、諸所案内し呉れらる。

◎二日午前九龍に渡り其附近見物立戻りてピーク鐵道(ケーブルカート)にてヴヰクトリヤヤウンテンに登る、山上を巡覽しヒクホテルに休息、茲にて海軍大佐山内萬壽治(爐雪)氏に落合ふ。

峰造る雲に突當る帽子哉

涼風の何處迄君を送らんか

◎前の句はケーブルカーにて頂上に達せし時、後の句は山内爐雪氏の歐洲行に別るゝ時、一日は折々雨今日は晴。

◎香港にて道路、市場、墓地、等の清潔なるを見、東京の市場は早速改良して、中央の地位を移すに不及と觀念せり。

◎三日早天住井氏と同道淺口丸といふにて廣東へ渡る、淺口丸は萬事行屆たる貳千餘噸の清潔なる船にて、英人の營業に屬す、船中支那

人の落語家抔を備へ乘客を慰む、廣東は所謂珠江にして灣廣く水深く、大船、巨艦、優に相並んで進むを得べし。

萬噸の船呑て江の優に涼し

◎船の江に入るや名高き廣東女はジャンクをあやつりて多數群がり集り、荷物を運び客を誘ふ、其活潑なる言語に絶す、予が英居留地ヴキクトリヤホテルに投ぜしは午後四時半にてもありつらん。

◎廣東は千八百三十九年阿片事件の林則徐に、又千八百五十七年の英佛同盟軍に、又近年北京政府改革問題の康有爲の生地に仍てよく記憶せらるゝ所たり、盜賊多き爲め夕方よりは街路に門を鎖して、或る市中は往來し能はず、物品の賣買ある事なし、夫れを原因に質屋の土藏は、豆腐を積みて穴を明けしが如くに見ゆべく、間口狹く奥行淺

く、徒らに高く四角に造り爲す、是盜人の侵すに不便ならしめしものなり、予等他邦人の之を遠方より望み見る甚だ奇なり、其人氣の荒き事は商會の門前に金文字にて「禁喧嘩」を彫りて額として掲げあるにても知らるべし、其婦人の髮は吾元祿時代のものと髣髴たり。

◎四日早天より轎に乘りて出かけたり、昨日は時々雨ふりぬるも今日は晴天にて都合よく、流石に淸國第一の商業地丈其繁昌他に見ざる所、華林寺の五百羅漢に伊國の奇傑マルコポローの像を見、貢院の貢擧試驗は珍らしく、鎭海樓、砲臺、觀音堂を一覽し唐の韓退之、漢の虞公、宋の蘇軾を祭れる三君祠といえる所あり、双山禪林といふには死人の府なるもの存す、番人在りて探勝家に見せしめ若干の手數料を取る、其箇する所のものは有名なる人々の棺にして、一箇五千兩又は

七千兩にて出來せしものゝ由、其形長く丸く、優に大人の横臥し得べく造りしものにて、多くは艶消しの黑塗りなり、其内容は松の赤身を用ゐ遺骸は朱其他藥品にて詰め、決して腐敗せざらしむ、現に二三十年經過せしもの數箇ありて、夫れにも今以て現世に在すが如く、毎月親戚の人々挨拶に參らるゝとなり、家屋の構造の打揃ふて日本の如く區々ならざる、藥舖の軒を並べし、看板の見事なる、更に花舫なるものは兼々フラハボートとして聞及びしが、到り見れば其澤山なると趣向の整頓せると、水上生活者が巧みに船をつなぎて一大市街を造り上げたる、其中に住居者の千差萬別なる、店を張るものあれば、素見を爲すものあり、物を賣りて行く人あれば、用を聞きに來る者あり、客あり妓ありて今の今迄陸上の家屋と思ひしもの、頓てゆるぎ出して

珠江の沖に浮び、涼を納れ弦を彈じて別天地の感あり、不思議といふも愚かなり、廣東人口二百萬と稱す、就中二十餘萬人の水上生活者は其昔北の人南の人を追ひ川に入れしめしそ始めなるべけれ。

◉時と足と得る限り巡覽し、川を渉りて對岸河南といふに有名なる海堂寺あれば、夫れを參拜し五百の僧侶の多くは洗足にして、物乞ふ汚穢者にひとし、臺灣にても支那にても、僧侶の不紀律と無學にはほと〳〵呆れたり、黄燈頃寓所に戻る。

◉五日江通號にて早天出發午後三時半澳門に着、三日以來晴天不取敢ヒンキーホテルに入る、直に附近の巡覽に出掛く、三百年前日本人の手に成りしといふ寺院の門あり、堂々たる法衛の前に公開の賭博場あり、詩人カモエスの像を見、更にクリインアイランドに英人のセ

メント製造所を見、又荀領と清國との國境へ到り兵士の武器を抛ちて十六むさしてふ勝負事を爲し居るを見て、太平樂を感じ、日本遊戯の由來を知りし心地せる、歸路田野橘治氏に逢ふ、當時日本人の澳門に在る氏一人のみ、旺厦といふ所に居住す、氏の云ふ此地に篤志家ありて厚生學舍といえる私塾を開き、學士智者を招き廣く子弟を敎ゆ、而して其多くは慈善事業に屬すと、相携へて到る、主人張壽波字玉濤大に悅び盛に筆談を試み、某旗亭に宴を開き一族張有韜、張若文、及舉人、陳榮衰、古學者何樹齡、其他陳筱江、劉鐵君、劉俊卿、王鏡如等相會し翌午前一時迄歡談。

食卓に文字書きて談す納凉哉

◉六日曇天、昨夜は更けて少し雨、今朝は海上荒模樣、午前七時香山號

に乘込み十一時歸寓、郵船會社の三原繁吉氏及高柳豐三郎氏等案內し呉れられ港內を巡覽す、鎌倉丸を訪ひ又九龍の船渠、倉庫、更に香港政廳を訪ふ。

◉七日晴天、水源地、領事館、競馬場に到る途に田島彦四郎氏と語る、夕方より三原氏住宅の晩餐會に臨む、新嘉坡領事森川喜四郎、陸軍の山口勝、ボンベイの金平豐太郎、川村伯令息、荻原工學士、長尾倉三の諸氏及鎌倉丸の事務長等同席、就中山口氏は沼津以來の知人、川村伯は東京にて逢た事ある人、夜九時過歸寓、其途中少しく香港馴れたるにより、獨散歩し誤てヴヰクトリヤマウンテンの奥に迷ふ、稍ありて一人の印度人に逢ふ、よく見れは巡査なりし、餘りに人影なき場所なれば自分の寓居を訪ひ試みしに、全く方角を間違へたれば、拾數町送られ

て漸く見知れる道路へ出で、辛うじて戻りつきぬ、

◎八日晴天、午前十一時仙臺丸へ乘込む金平氏同船、上野領事、三原、高柳、長谷川、窪田、其他諸氏に見送られて出發す、九日午前汕頭へ着、雨降る、十日午前六時過厦門へ着、小雨間もなく晴る、思ひ出し行きがけに見殘せし勝地を探れり、要するに虎溪巖、南普陀寺、碧山巖、風動石、白鹿洞、仙人洞、何れも文人畫的なるは周圍の光景と併せ見ての事にして、厦門は遊杖の甲斐ある地なり、十日時々雨來る、十一日十二日航海中天氣、同夕方ウーソン沖にかゝる、是檢疫の爲めなりし。

◎十三日曇天、午前六時半より七時迄に檢疫すみたり、九時に上海着、領事、郵船會社支店長永井久一郎氏、及澤野氏、外夫々迎へらる、不取敢米租界の東和洋行へ投す、午後より永井氏と馬車にて市中見物、三井

洋行の小室三吉氏に逢ふ、又櫻井氏と四馬路を散策す、夜寓所へ戻り家僕に問ふに金玉均の慘殺せられしは何れの家なりしやを以てす、家僕の云ふ此家なりと、更に問ふ何れの部屋なるやと、彼れ云ふ此部屋なりと、又問ふ何れの邊なるやと、彼れ云ふ今貴下が横はれる其寢臺の上なりしと、又問ふ此寢臺は其時のものなりやと、彼れ云ふ實に其時の物其儘なり、されど意を安んぜよ其被布は血だらけになりしに由り之を取替たりと、予は此問答を爲し終て一句を得たり。

蓮の實の飛び込みし家に旅寢哉

◎十四日晴天、三井洋行の藤原氏來訪、すゝめられて同店へ轉寓、櫻井、金平兩氏案内にて馬車を走らせて又小室三吉氏とも同樣に夕方迄愚園、張園、城内外、市場、水道、紡績廠、屠牛所、正金銀行其他を訪ひ夕方歸

寓、夜西京丸事務長細川氏の講談あり、永井氏領事館の松村氏外來訪、夜十二時漢口へ行かんが爲め大元丸へ乘込む、小室氏馬車にて送られ、櫻井、深野、兩氏船中迄世話し呉れらる。

◉十五日晴天、楊子江の廣大なるは今更にも云はず、只一言せんか、川巾の廣き所六十哩あるべしとは覺え置きてよかるべし、江蘇省通州、常州府江陰、此地は山上に砲臺ありて南洋艦隊の根據地なり、鎮江、是は孫權都して京城と稱せし地にして阿片事件の時英清の大軍混戰せし所なり、此邊より天津へ通ずる運河あり、以上通過。

◉十六日晴天、昨夜は深更より少しく雨降る、午前七時江寧府に寄寓、江寧府は有名なる明の舊都南京城にして金陵といえるは是なり、此城内の廣き事は清國第一と稱す、其城壁の山上にうね〳〵と連亘せ

る港を擁し丘陵を含み市街を容る、且楊子江沿岸の葦蘆青々と打つゞけるが江風にゆらげる其古風の俤得も云はれじ、實に南朝四百八十寺を思ひ起して萬感に堪へず。

薫風や古城のゆらぐ葦蘆の中

◉安徽省太平府蕪湖は千八百七十六年の芝罘條約にて開港せしもの、此所にも一寸寄港、大通といへるを通過せし頃は夜深かりし、如何に大なるも河船は又格別、壹夜心地よく雨來るも三十分とは降らず、風を受け甲板に月を賞す、此風光を味はざる人をあはれむ。

◉十七日晴天、安徽省首府安慶に一の華塔あり連鎖を以て之を地に引く、其謂れに曰く、對岸に寺院あり、之と語らんが爲めに毎夜川を越えて華塔の行くあり、爲めに住民の信心對岸に移らんを恐ると、仍て

斯くの如しと、此例清國には間々あり、午後二時過馬當磯に到る、是陸放翁が杭州より運河にて鎭江迄出て、夫れより四川へ登る時急流にて困難せし塲所なり、岩窟あり、丘陵あり、柳數千、古宮の安排或る部分は南畫、他の部分は北畫に等しく、廣東の珠江此所の楊子江、何れも川に添ふ所の山岳は柔らかにして、四條風の畫にも見べく、臺灣沿岸、厦門より香港に到るの海岸、北畫の峨々たるに似たるものあり、楊子江中此地の如きは稀れなり。

◎彭澤縣は山上に城壁あり、楊柳諸所にありて、老鶯を聞くべく、此地陶淵明が知事たりし所にして、五斗米の爲めに腰を屈せずして去りたりとの話柄を殘せし地なり。

◎湖口縣鄱陽湖は、呉の周瑜が曹操の南せん事を防がん爲め船調練

を爲したる湖水にして、楊子江の濁々たる中に綠なせる水色際立ちて、眼覺めんばかりなり。

◎九江は昔時の潯陽にして、白樂天が夜る客を送りし湓浦江口に船をとゞむ、琵琶行の名什に名高き此地より指顧の間に廬山あり、五老峰、香爐峰、双劍峰、李白、白樂天、朱子、是直に聯想すべし、ゆかしくなつかしく、今宵は如何なる夢か見んと夜更けて打臥しぬ。

◎十八日晴天、石黃港は大冶の鑛鐵を出す所にして、大活山より此所迄は鐵道にて運び、夫れより楊子江の水運にて漢陽の晴川閣の傍へ着き、更に鐵道にて附近の製鐵所へ送り込むなり、又武昌といふ所あり、是は漢口の武昌とは混すべからず、黃石港より少しく漢口寄りの方にて孫權の居城たりし所なり、又午前十時頃湖北省黃州府に寄港

す、此地は森申君の舊都にして蘇東坡の赤壁の所在地たり、年々歳々河岸に異動を生する長江筋の事とは云ひながら、歴史上よりせば餘りに桑海の變あるが如く覺ゆ、蘇子の文章に由り天下に赤壁を紹介せしも、恐らく文は實に過たらん、暫く休息撮影抔して十二時前出發、船は晩凉を負ふて漢口に入る、船中數日を經宗方氏在るを知りて之と語る。

◎商船會社の前原氏は廿七年の頃奈良へ同行せし人にて此所の支店長たり、夫妻とも〳〵世話し呉れらる、晩餐會せられ瀬川領事はじめ、在留日本人多數來會、此夜市中見物し、更けて船に寢ぬ、暑氣壹夜九十五六度、川風を受くるにあらざれば堪へがたし。

◎十九日早天起床、小雨間もなく晴る、領事館に到り領事と共に決定

せし日本居留地其他を實査し、佛領事館へ同行し、ドートルメール氏と談合する所あり、是日本人の不便を感ずる事多き由を聞きたるを以てなり、夫れより時と足とのゆるす限り巡覽す、當時日本の居留地は漢口の「漢南雄鎮通濟門」なる文字を刻せし大門外にして、楊子江畔に間口百丈奥行百二十丈の場所を有し、獨逸は間口三百丈奥行百二十丈を相並んで有し露、佛は他の場所に同一廣さのもの各有せり、是遼島半島干渉事件の結果として決定せるものと聞く。

◎漢口は長江(楊子江)と漢水(漢江)とを前にして後ろの方に城壁ある地なり、故に長江を裏にする家と漢水を裏にする家とあり、汽船は長江のものとすべく、ジャンクは漢水のものとすべし。

◎長江は上は四川、雲南、貴州に下は上海に達し、漢水は河南、陝西、甘肅

に達し且洞庭湖に連絡して南水あり、漢口よりは洞庭湖にも到る事容易なるべく、又漢水を上らば晶羅にも遠からざるべし、長江と漢水とは或部分丁字形を爲し、長江の方は漢口の對岸は武昌にして、漢水の方は之を渡れば漢陽なり。

◎漢口は各國居留地、商會社、領事館等の所在地なり。

◎漢陽は彼の伯牙の古琴臺及小西湖(月湖)大別山上の禹王廟、山下には晴川閣あり、兵器製造所、製鐵所、此時分は北京より西北廿五清里なる蘆溝橋より漢口迄、七百哩の蘆漢鐵道のレールを製造しつゝありしなり。

◎武昌は黄鶴樓のある所、兩度の火災に罹りしも名勝地たるを失はず、紡織所、武備學堂、自强學堂等なり。

◎孫權の築けりといふ夏口城跡、梁武帝の駐軍せる遺跡なりといふものいづれも名のみながら、何となく別れし雁に逢ふた心地せらる。

◎上海と漢口は六百哩にして、漢口より宜昌三百七十哩、之れへは吃水六尺乃至八尺の船ならでは上るべからず、夫れより重慶へは漸くジャンクを以て達するを得べし、此間六百六十哩二十五日間乃至三十日間を以て上るべくも、下るには三日又は五日間にて足るべし。

◎領事館や在留日本人等の招きに一寸顔を出し、夜に入り船に戻り、人々に見送られて、以前の川筋を以前の船にて下るべく出帆す。

◎行きがけに壹の塲所、此度は月夜、先きに夜の港口戻りには日中、參考には至極よろし、白露江に横はる抔は楊子江の曉天にあらざれば口にすべからずと感ぜり。

杜宇幾度か水に落んとす

◎雨來る時、待得たる時なり、風ある日生返へれる思ひすめり、斯くして廿二日午前十時過上海へ歸着、領事小田切萬壽之助、永井久一郎、小室三吉諸氏出迎へらる、直に諸所へ出かけ或は數里の外なる龍華寺へ詣で、又は途中に田岡嶺雲氏に邂逅して閑談時を移し、領事の案内に一夜を更したる事もありて、廿四日午前十時頃神戸丸へ乘込み、廿六日午前三時前長崎へ着、六時三井の支店長松尾長太郎氏小汽船にて迎へられ、上陸直に三菱船渠一覽及市中を見物し小憩の上十時五十八分發車にて武雄へ着、一泊の上溫泉の効能を試み、廿七日午前八時五十分同所發十一時三十九分二日市へ下車し、太宰府へ參詣附近の勝地を探り午後二時五十二分乘車博多へ下車同所へ一泊九州日

報社の野村秀氏、福岡日々新聞社の中野啞蟬氏來訪、廿八日門司より横濱丸にて神戸へ夫れより鐵路にて歸京す、楊子江の沿岸を分析せば俳趣味の多き、其日景物の種類擧て數ふべからず、今試みに記憶の大概を左に掲ぐべし。

◎山、小山、遠山、連山、丘陵。

◎船、小舟、大船、田舟、釣舟、曳舟、帆、莚帆、アンペラ帆、青色帆、孤帆、帆檣林立、帆影參差。

◎港、灣、入江、川と川と川、枝川の縱横、湖、沼、池、埤、圳、艫を押す、舵を操る、四手網。

◎寸馬、豆人、雲烟の變化。

◎舟の丘に在るもの、童子の其上に遊ぶもの、水牛の群を爲す、黄牛

の遊ぶ、山羊の群るゝ、鹿の飛出す、馬の嘶く、雉子のかける、雲雀の舞ふ、蟬のさはぐ、物焚く煙、農夫のさま、水車、漁村の斷續、葦蘆の數百里、曉天の白露、城塔高く聳ゆ、古廟、堂塔、寺院、砲臺、高樓、紅燈波に浮ぶ、鐘鼓を鳴らす、茅屋、軍艦、轎に乘る人、日傘をさす人、米包を擔ふ男、舟を行る女、旭影、月波、黑き鳥、白き鳥、白班の鳥、鷺、河豚、路士(鳥)、鶴、老鷺、驢馬、白雨俄に到る、巖上の佛、巖穴の祠、楊柳數千株、幾多風變りの笠、蘆荻、相思樹、鹽田、江風、明月、筏住居、婦人の風俗、軍人の馬上、田のさま、畑のさま等。

滿洲丸

(◎)

日露の戰爭も中〳〵にはげしく、世界の眼と耳とは全く此一方に傾き、他に働くをゆるさゞるありさまとなりける、明治三十七年十二月廿六日に政府は觀戰艦として滿洲丸を出せり、英國海軍ペケナン大佐外一人、米國陸軍ウード砲兵中佐外一人、獨國海軍トルンムレル少佐、佛國海軍マルチニー大尉、伊國海軍バルザグリ大尉、亞爾然丁國海軍エム、ドメック、ガシヤ大佐、伯剌西爾國陸軍サンパイヲ中佐、瑞諾國海軍リンドベルヒ少佐、墺洪國海軍大尉マンスフエルド伯諸氏の外國士官と、我貴族院よりは子爵伊集院彥吉、男爵尾崎三良、高木兼寛、

田島竹之助、衆議院よりは森久保、澤田、横田、森本、武藤、板倉、小山田、濱田、鈴置、立川、關野、荒川、楠目、佐々木、川原、諸氏と予となり、廣瀨吉郎氏は衆議院書記官として斡旋の爲め乘込み、財部海軍中佐、山口同少佐、矢部海軍々醫中監は政府より付せられ、前田正名氏と田中海軍少佐とは便乘せるなり。

(◎)

船長は加納鹿之助氏、事務長は原田幹太氏にして、横須賀より特に水兵貳十人保護の爲め乘込めり、又船員を計算せば、士官以上十七人外に約百人、ボーイ十五人外にバッスボーイ、理髮師、洗濯屋、雜貨商、講談師知山等なり。

(◎)

廿六日晴天にして午前十時三十分新橋發、汽車中にて佐々木信綱氏より。

雪消えてほゝゑむ梅の下かけに
きかばや君が遼東の千句

とものし送られたり、午後横濱港にて滿洲丸へ乘込み直ちに出帆、滿洲丸は長三百六十尺横四十三尺排水貳千九百八十一噸、登簿噸數壹千九百八十一噸にて名高き捕獲の露船なり。

(◎)

同日より廿八日迄天朗かに波靜に、起きて、寢て、まゝならぬはなし、何となく幸先よき心地せらるゝ折から、長防沖馬關海峽六連島を經過し、玄海灘にかゝる、是二十八日の前十時半頃なりしに、曾て露艦の

爲めに難をうけし佐渡丸に逢ふ、無量の感なき能はず、此時沖の島東十九哩の地點に於て、露船を捕へて門司へ行くよしの無線電信高千穗よりかゝりたるを以て、乘甲板に上り望遠鏡にて之を檢せしに、高千穗と其捕へられたる船の、掌上に見るが如きに一統思はず快哉を叫べり。

年の暮船に電信得たりけり

(◎)

當時長崎港へは水雷を敷設しありたれば、六連島へ信號にて打合せを爲し、入港の事を知らしめ、案內船を待て右に五島列島左に佐世保を見遣りつゝ夜八時頃着、戰地に在す所の閑院の宮殿下への獻上品及各司令部等への土產物を調へ、此所に一泊せり。

廿九日は滿洲丸甲板上にて紀念の爲め一同撮影し零時五分抜錨す、正午大本營より來電、二十八日豫定の通り二龍山を攻擊して午後七時砲臺全部を占領せりと乘喝采、午後三時より雨而して風之に加ふ、又々大本營より來電、聯合艦隊司令長官第二艦隊司令長官今般吳發、明三十日午前九時三十分入京の筈、東京市民京濱外國人大歡迎の支度中と、此夜知由及立川、森久保兩氏の落語、講談等ありたり。

(◎)

三十日は午前三時頃より大風、波甲板に上る、朝鮮木浦沖を過ぎ、ハロ浦外槇島錨地、避難せしは午前十一時頃なりし、雨來り雪來りしも間もなく止む。

(◎)

此邊へ水雷の漂流し來るものあれば、天明を待て發航する事として一統落付く、夜知山の講談高木博士の講話ありたり。

海の年錨投じて暮るゝかな

(◎)

三十一日風靜まりて晴れたるに由り、午前七時拔錨。

年既に暮て錨の雫かな

大本營より來電、東郷、上村、三十日九時半入京、直に參內勅語を賜はる歡迎盛なりと、無線電信の便いかにぞあるらん、夜知山の講談森久保氏の軍談ありたり。

(◎)

明治三十八年一月元日殊に晴天、午前八時前海洋島より初日昇り

かゝり、長山列島に進みし頃日影赫々たり、此時食卓を開く、蓄音器にて君が代を奏し、スープへ雜煮餅を入れ、三鞭酒、日本酒等を出し、主人として財部中佐の音頭にて一統兩陛下の萬歲を唱ふ、日清戰役の昔を偲ふべき此黃海、日露戰役の勝報を受けつゝある此黃海洋中にて、元旦を祝す、日本男子たるの其感如何、句となりしもの三、拙なりと雖も此時此場合の眞情と事實とのみ、

元日や我は日本に生れたり

卓上や世界の人と雜煮もち

武裝せし海武裝せし山初日影

萬歲の唱和後之を朗吟して當年の紀念とす。

(◎)

午前十一時頃無線電信あり、旅順に於て明日松樹山占領、今朝來望臺攻擊中と、其報告の濟まざる內に身は既に二百三高地に立てるの心地せり、正午過大連へ入港、フロックコート、シルクハットにて一統小蒸滊船金山丸にて片岡第三艦隊司令長官、又山田第三艦隊司令官等を慰問し、上陸の上大連灣防備隊司令部に司令官阪本海軍大佐を訪ひ同氏の案內にて發電所其他を巡視し、夫れより遼東守備軍司令部に西大將を訪うて旅順攻擊の情況に關し說明を受く、會談中旅順砲臺攻擊の音響能く聞ふ、夕景棧橋始め諸所巡見、夜七時半頃本船に歸る、乘て長崎にて用意せし土產物を夫れ〳〵へ贈る。

(◎)

二日快晴、各司令官等より答禮あり、朝食卓上にて昨日望臺全部我

占領に歸したりとの報あり、十時上陸、軍政署に就き既往と現在の事實を聞き、又は捕虜を見舞ひ、正午よりは西大將招待會へ臨む、何れも旅裝なり、宴始まり支那芝居の餘興中旅順より電話にて、露軍より軍使を送り我之を諾して今水師營に會見中恐らく開城に至るべしとの一大快報に接す、衆萬歲を唱ふ。

(◎)

午後四時四十分議員專用列車を發し、東淸鐵道にて遼陽に向ふ、外國人は殘りて旅順を研究するとの事なり、福井工兵大尉、野田憲兵中尉、寺崎部員、外に番兵等乘込周旋せらる、東淸鐵道は旅順よりハルビン迄六百九十八哩なり、南關嶺、大房身を經過し、金州停車場へ着せしは午後六時半過なりしも、此邊總て夜の明くる一時間余遲く從ふて